

うなご、賢い、六ヶしい考へを有たすして、たゞほれくと如來の御恩をよろこぶ感佩させ
て頂くのみであります。

五、「たゞほれくと」といふのは、とことん惚れ込むことである、惚れやうにも色々あつて
若い男女が甘い戀に落ち、遂に事情も許して夫婦になるまではよかつたが、これまでお互に遠
慮し合つた仲では、見えなんだ我儘が、次第に出て来るやうになると、犬も喰はぬ夫婦喧嘩を
やり出すやうなのは、充分の理解のなかつた事が原である。その代り、初の頃はさうでもな
かつたが、だんく同棲してをるうちに、相互に理解ができ、夫は、自分が一生連れ添ふに足
る妻と知り、妻は、自分か一生連れ添ふに足る夫であると知つた仲ならば、そこに眞の夫婦の
情も起るのである。たゞ一生の夫婦でさいこのとほりであるのに、まして永遠を契て下さる如
來と我との間である、とことん惚れ込まずに、どうして一切がお任せできませう。

六、他方信仰に安住して、口にお念佛を相續する人が、自然に倫理道德の規條にも叶ふとい
ふ事を、私は如實の信者の上に見ることができると斷言しては、かりませぬ、信仰に篤い或
る豪商の主人を訪ねて、半日法縁に浴しました時、其人のいはれるのに、お念佛を相續さして
貰うてをりますと、妙なもので、その中から、次から次へ、色んな善いことがで、まゐります
それで私は、倫理も道德も、お念佛を相續させて貰ふ外にはないと思ひます、かやうな結
構なお念佛でありますから、そのお念佛のよろこばれるやうに、日暮しして貰ふがよい、法

たゞほれ
ぼれと

然聖人が念佛の稱へられるやうな生活をせよと仰せられた、あれが私の生活の仕方を指示さ
れたものだと信じますと、私は此人の日常の行爲と、此告白とを對照して、これだと思つた
のである。

七、江州の清七といふ老人の談もきいた、彼は裸一貫から二十萬圓近くの資産を造り上げた
が、入信してから其財産を種々の公共事業に投するが、使つた丈は、すぐにもどつて來ると
いうて楽しんでをるさうである。隣村に通ふ道路が、迂廻して遠いといふところから、田圃の
中に一直線の道路を造り、兩側の田地の地主には、作物が少からうといつて、年々心附として
幾らかのお金を拂ひ、村人の便利を圖るばかりか、一部の人も不平の心をもたせぬやうにし
てをる。年に一度ぐらゐ、旅費がかゝつて參ることのできぬ貧乏な家を訪ねて行きて、汽車賃
を出して善光寺參りをさせる。又感心なことには、さういふ貧乏な家に行きて、下駄の穿き潰
れたのが目に當ると、一寸借りて行きますといつて持ち歸り、ちやんと高い齒を入れてもつて
來たといふやうなことをする。年に一度の御正忌には、一週間の間、本山へつめきつて、御堂
のお世話をして喜んでをる、粗末な風をしてをるので、あれが二十萬圓の金持の主人とは、ご
うあつても見られぬといふことである。かういふ生きた信者は、今日と雖も、必ずしも少くな
いことゝおもひますが、之が「自然のことはりにて、柔和忍辱のこゝろもいでくべし」とある道
理に叶ふた人と申すものでありませう。

八、次に自然といふことを、他方のことであるというてある、これは今鈔のみでなく、親鸞聖人の常に仰せられたところであり、而も之は親鸞聖人にはちまつたることではなく、遠く經論釋の上にあることでもありますから、尊號眞像銘文の初の方に、大經東方偈の自致不退轉の自の字、惡趣自然閉の自然の二字、自然之所牽の自然の二字を、みな他力願力佛力のこととして釋してをられ。一多證文の爲得大利則是具足無上功德の釋の所にも、他力自然の解があり、末燈鈔の第五章には、自然法爾の事として一章全體が自然の解釋であります。三帖和讃の終にも、これと大同小異のお言葉があります。その内、最も詳しい末燈鈔の第五章のお言葉を拜讀してみます。

自然法爾事

自然といふは、自はおのづからといふ、行者のはからひにあらず。然はしからしむといふことばなり、しからしむといふは、行者のはからひにあらず、如來のちかひにてあるがゆへに、法爾といふ。法爾といふは、如來の御ちかひなるがゆへに、しからしむるを法爾といふなり。法爾は、この御ちかひなりけるゆへに、おほよそ、行者のはからひのなきをもて、この法の徳のゆへに、しからしむといふなり。すべて人のはじめてはからはざるなりこのゆへに義なきを義とすとしるべしとなり。自然といふは、もとよりしからしむるといふことばなり、彌陀佛の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀

佛とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんどもあしからんども、おもはぬを自然とは申さずとさふらふ。ちかひのやうは、無上佛にならしめんとちかひたまへるなり。無上佛とまふすは、かたちもなく申さず、かたちのましまさぬゆへに、自然とはまふすなり。かたちましますときには、無上涅槃とは申さずかたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめて彌陀佛とまふすとぞ、きゝならひてさふらふ。彌陀佛は、自然のやうをしらせんれうなり。この道理をこゝろえつるのちには、この自然のことは、つねにさたすべきにはあらざるなり、つねに自然をさたせば、義なきを義とすといふことは、なを義のあるになるべし、これは佛智の不思議にてあるなり。

九、この自然法爾章は、初の方に、「自然は他力なり」といふことを明し、中段に「かたちましまさぬ無上佛」に至らしむるのがこの他力自然の目的であることを明し、後に、誤解を誡められました。今章の自然の解は、即ちその中段を略し、前後を一層約言いたされたもので、具略はあつても、彼此同一の論旨なることは、辨するまでもありません。(大正九年一月稿)

第二十講 方便の教意

第十七章の概要

一、此の一章は、化土に生るゝ人、すなはち、眞實の信仰に住し得ずして、自力疑心をもつ

て、本願を眺め、淨土往生を願ひ求むる者の、落着く先は、どうなるであらうか、といふ問題に對して、如來の絶對の慈悲は、かくの如き者をも捨て給はずして、遂に眞實報土に往生せしめたまふことをのべらるゝのであります。そもく茲にかういふことを解明せられねばならぬのは、化土に生れた者は、とうく地獄に墮ちるのだと云ひふらす者が、あつたから、その蒙を啓くと共に、佛の方便の教意を明かにせらるゝの必要があつたのである。

二、眞實の信仰に住したる者が、必ず間違なく救はれることは何れの經論釋を拜見しても明かに示されてありますが、彌陀を念じ、淨土を願うても、未だ眞實の信仰に住し得ないもの、落着く先の問題については、どんな風になるのだと、何人にも合點がゆくやう、ハツキリと示されてはありませぬ。されば之は何人も聞かんと欲するところの問題であつたのであるが、親鸞聖人の教行信證の第六卷化土の卷こそは、實にこの問題について、最も徹底的説明を施されたもので、たしかに先人未踏の天地を開拓せられたものと稱してよい。それでは、化土の卷には、どんな風に説いてあるかといふに、此章にははれたとほり「信心かけたる行者は、本願をうたがふによりて、邊地に生じて、うたがひのつみをつぐのひてのち、報土のさとりをひらく」といふ事に約まるのであります。されば、此章にははれるところは、すなはち彼の化土の卷を要約せられたものとみることができから、一章甚だ簡單ではあるが、眞宗の教義の上からみると、まことに大切なことが説かれてあると云はねばなりません。

三、化土の卷の説明は、實に先人未踏の天地を、親鸞聖人が開拓せられたものであると申すもの、經論釋にないことを、特にこしらへて云はれたものではありませぬ、みなたしかなる據り處がありますから、今書を拜見する者は、説明を待たずして、これが佛説の思召に契當する事を、信ずることができます。即ち親鸞聖人は、眞實の信仰に住しえざるものをも、最後にはお助けくださるといふ事は、もとく如來の本願に誓はれてあるからであるといふことを顯はさんがために、化土の卷の最初に、先づ第十九願第二十願の願文を引き、それから、種々の經論釋を引用して、此旨を明かにせられてあります。然るに若し、この頃一部の人の云ひよらしてゐるやうに、邊地の往生をとぐるもの、後には地獄におつるなど、いふやうな妄説は、たゞに先師親鸞の思召に叶はないばかりか、實に「如來を虚妄」にし奉る譯であつて、誠に勿體なきことであるぞよと誡められたのであります。

四、化土の卷や本章を拜見して、私は、今さらの如く、如來のお慈悲が如何にも大きいことに、驚かざるをえません、番に第十八願の眞實の信仰に住したるものを救うていたくばかりでなく、第十九願の如き自力の機執の強い者までも、第二十願の如き稱へる事の好きな奴までも、みなお洩らしないのである。否、たゞにそればかりか、如來の攝取の光明の網は、三世に十方に、重々無盡に張り詰められ、如何なる衆生をも、悉く攝め取りて捨て給はぬ廣大のお慈悲であります。私共は、少しづつそのお慈悲を知り、少しづつそのお助けを喜ぶこと

の出来るやうになつて、現在たゞ今、はぢめて、如來のお慈悲の中に這入り込むだやうに思うてはなりません、私共が、少しも如來を知らぬ先、寧ろ、如來に背いて、逃げることに、かゝつてをつた時分から、すでにその光明の中に抱きかゝへられて、離してくださらなないのであります。

五、光明で抱きかゝへ、名號のいはれを聞かせて、助けて頂く仕掛けが他力であります。生れたての赤ん坊は、泣く事しか知つてゐませんが、母親が抱きかゝへて、求める心もない口の中に、乳房を入れて、吸ひ付く稽古をさせ、どうも赤ん坊の方から、求め探すやうにするではありませんか、抱きかゝへるのは光明であります、乳房は名號であります。親鸞聖人が教行信證の行の巻に、光號因縁のお釋を試みられたのは、まことにかやうな卑近な事例を以て、絶對の他力を説明して頂いたものであります。

まことに知んぬ、德號の慈父ましますば、能生の因かけなん、光明の悲母ましますば、所生の縁をむきなん、能所の因縁和合すといへども、信心の業識にあらすば、光明土にいたることなし。
眞實信の業識これすなはち内因とす、光明名の父母、これすなはち外縁とす、内外の因縁和合して報土の眞身を得證す。かるがゆへに宗師、光明、名號をもて、十方を攝化したまふ、たゞし信心をして求念せしむと、のたまへり。

光號攝化

この文の前段は、名號が父となり、光明が母となり、この父母の因縁で、信心の子が宿るのである、これ即ち、信心が、他力より授けらるゝ、摺梅を讀へられたものであります。後段に進んで、さらに、その信心の種が、だん／＼太つて、赤ん坊に生れ、成人し、遂に報土の眞身といふ果上の人になる摺梅を明して、信心を内因とし、光明(母)名號(父)を外縁とすと云はれてあります、これは獲信已後往生までの、一切の生活を、みな他力でさせて頂くことを讀へられたのであります。

前段(初重) 名號(父) — 能生因
光明(母) — 所生縁

(子) 信心の業識(獲信他力)

後段(後重) 信心の業識 — 内因
光明、名號 — 外縁

(子) 報土の眞身(往生他力)

即ち私共が、信を獲るまでと、信を獲てからと、換言すれば一切みな他力海中の生活であります。

六、これによつて私共は、無始已來盡未來際、大他力の中に、朝な／＼起き、夕な／＼臥しつゞけさして頂くのであるが、さう考へてみると、茲に三つの重大なる意義を見つけぬ譯には行きません。

他力生活の三意義

第一、如來は實に盡十方無碍光にましくて、一微塵の上にも、一秒時間の間にも、その慈悲のあらはれて下さらぬことはないのであるから、私共は、如何なる時も、如何なる事も、みな感謝を以て迎へなければなりません。

第二、如來のお慈悲は、常に私共をあはれみ育みましくて、向上せしめたまひ、進歩せしめ給はんと念願し給ふのであります、たとへ私共の目には、墮落するが如く、退歩するが如く見える場合があつても、それは一時的變調であつて、大體に於て、向上進歩せしめられるものである、即ち私共は、他力の大道の上を進化しつゝあるものであります。

第三、信仰とは如何なるものぞやといはゞ、已上のべたるとほり、私共が、時間的には進化しつゝある、空間的には感謝すべきものである、といふ事に、心の底から目が醒てその確信を以て生活するやうになつた事を申すのであります、たゞ一往知つただけ心得ただけでは、信仰とは云ひ難く、必ず生活と伴はなくてはならないのであります。

七、本章は前後三段に分れまして、その三段が、前述の三意義に基いてをるやうであります、即ち、

第一段 信なき學解の罪……………「邊地の往生」より「みなされさふらふらん」まで

第二段 我等は進化しつゝあり……………「信心かけたる」より「たまはりさふらへ」まで

第三段 恵みに充てる世界……………「信心の行者」より「さふらふなれ」まで

信なき學解の罪

一、「邊地の往生をどぐるひと、つひに地獄におつべしといふこと、この條、なにの證文にみえさふらふぞや、學生たるひとのなかに、いひださるゝにてさふらふなるこそ、あさましくさふらへ」眞實の信仰に這入ることができないで、まだ自力疑心の分齊に止まつてゐるものが、そのまゝで命終ると、邊地懈慢界に生るといふが親鸞聖人の教である。ところが聖人の滅後に於て、いつしかかういふことを云ひふらすものがあるに至りました。即ち、邊地懈慢界に生れた者は、おしまへには地獄に墮ちて了うといふのであります。開うしてみると、眞實の信仰に任せざる者は、たとへ一心不亂に念佛を稱へて往生を求むる第二十願の機であらうが、諸行を修して往因に擬する第十九願の機であらうが、みな地獄に墮ちて了うのである。果して然らば、諸行往生を誓ひ給ひし第十九願や、稱名往生を誓ひ給ひし第二十願は、何れも虚妄の誓願になるばかりか、如何なる少善も無効ではないと教へる佛教の通談に背反する事にもなるのである。それとも何か確かな證據の文でも、お聖教の上にあるのたらうか。恐らく開なことをいはれた相承のお言葉はない筈である。それに、この妄説をふりまはしてゐる連中は、學生の中にあるといふ噂であるが、彼等は一たい、お聖教をどう見てをるだらうか、なんとまあ淺ましい事ではないか、と、痛く歎息せられたものであります。

二、信と不信によつて、悟と迷との分れるのは、信疑決判を立てる眞宗の常談である、さりながら、不信々々というても、まるで佛法を聞いた事のないのも不信の機である、聴聞した事はあつても、そんな馬鹿なことがあるものかと、誘つたり罵つたりするのも不信の機である、聞いて訝りもしないが自分の事として求むるといふ所まで行かないのも不信の機である、求むることは求めても、全く聖道門の信仰に住まつてゐるのも、矢張り不信の機である、淨土門の内でも、第十九願の信仰や、第二十願の信仰は、何れも不信の範圍に屬すべきものであります、かやうに不信の機を解剖してみると、その中には五種も六種も分れるのであるが、大體からいうても、

(一)淨土門内の不信の機、即ち第十九第二十の願の機、(二)聖道門的信仰の機、(三)全く佛法を信せざる機、

已上の三種に分れるのであります。是等の三種の機の中で、第三種の機は、まるで佛法の埒外にあるのであるから、迷より迷に沈むのは勿論であるが、第三種の如きは、その信仰次第、修行次第で、おの／＼相當の果報を招くべき筈である、されども末世に至ると、聖道門は有教無人であるから、聖道門の信仰では、完全な悟を開くことは不可能である。故に已上二種の機に就て克論する時は、茲に云はれてあるとほり「つひに地獄におつべし」というて、何等怪しむべきことではないが、第一種の機に之を適用することはできぬ筈である、何となれば彌陀すでに

第十九願第二十の願の兩願に於て、その救済を誓ひ給うてあるからであります。

三、しかのみならず、大經下卷胎化段を拜見すると、明信佛智というて、眞實の信仰に住した者を、「爲得大利」とほめ、不了佛智というて、未だ眞實の信仰には住せずとも、第十九第二十の願の信仰に住まる者を、「爲失大利」とおとしめられてあるけれども、この得と失とは、悟と迷とを意味する譯ではなく、彌陀の淨土中に於ける報土の證を得とほめ、化土の證を失とおとしめられたまで、あります。开してその化土に生れたものも、五百大劫の、眞實報土の證をひらかしむる仕掛が、如來のお手元にある、それを果遂の願と申すのである、果遂とは文字の如く果し遂げるの謂で、佛よりいへば、衆生救済の望を果し遂げらるゝことで、衆生よりいへば、眞實報土の往生を果し遂げるの意味である、いづれにせよ、化土に往生したのも、のちには眞實報土に往生させていたゞくに相違なく、「つひに地獄に墮つべし」といふ理由は成り立たないのである。

四、龍樹菩薩が易行品に「疑へば則ち花ひらけず、信心清淨なるものは、花ひらいて則ち佛を見たてまつる」といはれた意味も、上にのべたやうな三種の機類の中、第三種と第二種とを疑の機とし、到底悟りの花をひらくことができぬぞよと斷じられたばかりでなく、第一種の機が化土に生れて、五百大劫蓮華に包まれてをる間の事を「花ひらけず」と云はれたものだと云ふことも想像がつかます、けれども化土往生のものを、「つひに地獄におつべし」と云れたとは

考へられませぬ。又、法然聖人の選擇集に「當に知るべし、生死の家には、疑をもつて所止となし、涅槃の城には、信を以て能入とす」とあるは、第二種第三種の機を「生死の家」に止まる機とし、第一種の機は、「涅槃の城」に入る機に、攝めてのお談であることみられます。

五、廣く經論釋のお言葉を引きお話しする暇はないが、上に引いただけの二三の文の意味からいうても、今章所破の異解者がいうてをるやうな説は立たぬ筈である、若し此上不審があるならば、先師親鸞聖人の御和讃を拜見熟讀するがよい。

諸善萬行ことごとく、至心發願せるゆへに、往生淨土の方便の善とならぬはなかりけり。定散自力の稱名は、果遂のちかひに歸してこそ、をしへざれども自然に、眞如の門に轉入する。

それでも疑惑和讃を拜讀してみると、邊地懈慢界の往生を「七寶の獄」であるの、「牢獄」であるのというて、ひどく貶め稱してある、であるから、矢張り一種の地獄のやうなものであるに相違ないと思はれるか知らんが、化土に生るゝほどのものは、因位にすでに、疑の絆を以て、己が心を縛りてをるゆへ、これによつて招きたる化土の生もまた、眞實報土の如く解放された自由なものではない、これは機の感見であつて、因果必然の理と云はねばならぬ。自力諸善のひとはみな、佛智の不思議をうたがへば、自業自得の道理にて、七寶の獄にぞいりにける。

化土は機
の感見

化土の異
名

六、そればかりでなく、疑惑和讃には、この化土往生を貶しめ稱して、種々悪い名稱を用ひられてあります。

一、邊地 お淨土の片ほどり、隅ツコといふ義、

二、懈慢 邊地とつゞけていはれた所もある、懈はなまける、仰のまゝに順はぬ事。それがすなはち慢である。

三、疑城 うたがひを以て築きあげたる城の義、

四、胎宮 母胎にはられた子の様に、自由のきかぬ事。又は宮胎とも云ふ。

五、含華 蓮華につゝまれる事、胎宮と同意、

六、宮殿 特別に飾り立てた客間に通つた時は、親みが缺けて、窮屈なものである、これ化土の生に彷彿たるもの、

七、胎生 胎宮と同意義である、

八、化土 疑の心で變化した淨土の義、

九、牢獄 若くは七寶の獄前にのべしが如し、

それから又、化土の往生者は、どういふ不幸をみねばならぬか、と云へば、

一、佛恩を報ずる心がない、

二、三寶を見聞することができない、

爲失大利の相

三、年歳劫數を經る、僅かに五百歳であるから、無量壽の淨土に比ぶれば一瞬間であるが、彼は時間を超越する故長短の感はない、此は時間にくゞられる、之は化士の相である

四、大慈大悲を得ない、即ち利他心が起らぬ。

五、眞實の智慧が発現せぬ、即ち自利の不満足である。

六、諸の厄を受る、絶對に安住の地でない。

これ等が、謂ゆる爲失大利の相である。かやうに種々の貶稱を以て呼ばれた所以は、速かに眞實の信仰に住して、報土往生を證得せしめ給はんとするより外はないのであるから、

佛智うたがふつみふかし、この心おもひしるならば、くゆるこゝろをむねとして、佛智の不思議をたのむべし。

と勸めて、二十三首の疑惑和讃を結ばれてあります。

七、かやうに爲失大利の有様を知つて、眞實の信仰に歸入するの施設門が、疑惑和讃であります、とこゝが、その第七首目に

信心のひとにおとらじと、疑心自力の行者も、如來大悲の恩をしり、稱名念佛はげむべしとある一首は、少し變つたおすゝめである、たとへ眞實の信仰が得られずとも、そのまゝ押し通して、自力の稱名念佛を策勵せよ、开すると、その稱名念佛の六ヶ敷いことが、身にしられて、遂に弘願他力の信仰に、歸入することができるであらうといふほどの御教化であります。

この御教化に接してみると、私共のやうな濫といひ自力根性の奴には、あたまから自力を捨てるとは仰せられぬ、自分が、自力がすぎなら、自力のまゝでやれ、その内に眼が醒めて、眞實の信仰に這入れるぞよといはれるのであるから、すゝむべき道は、決して一つや二つではありません、至るところに開かれた門から、歸入することのできるのが、如來本願の大道でありますかやうなひろくとした本願の大道であるのに、そのことを知らずして、まことに手狭まな道の様におもうてをるから、邊地化士に生れたものは、先が詰つて、出る所がないやうに考へ、「つひに地獄におつべし」といふやうなことを云ひ出す事になるのである、けれども之れが安説であつて、取るに足らないことは、已上のべたところで、分るであらうと思ふ。

我等は進化しつゝあり

一、「信心かけたる行者は、本願をうたがふによりて、邊地に生じて、うたがひのつみをつぐのひでのち、報土のさとりをひらくとこそ、うけたまはりさふらへ」この一段は、佛の方便の手が、遂に疑ふものをも、御洩らしたまはぬことを讀へられたもので、前にものべたとほり化士の卷一卷の大綱が、こゝに攝まるのであります。

二、然らば化士の卷には、どんなことをのべられてあるかと申すに、その開卷第一に、全卷の大綱を掲げ出して、

至心發願の願、邪定聚の機、雙樹林下の往生、無量壽佛觀經の意なり、

門 三々の法

至心廻向の願、不定聚の機、難思往生、阿彌陀佛の意なり、これは後にも詳しく解説するとほり、第十九第二十兩願の思召をのべあらはし給ふたもので、これによつて建立せらるゝ所の、眞宗肝要の法門が、即ち三々の法門であります。已下、これについてのべることにいたします。まづ三々の法門とは、次の如く、三願、三機、三往生、三門、三經である。

三願		三機		三往生		三門		三經	
第十九願	邪定聚機	雙樹林下往生	要門	觀無量壽經	第二十願	不定聚機	難思往生	眞門	阿彌陀經
第十八願	正定聚機	難思議往生	弘願門	大無量壽經					

三、三願の内第十九願は、自力の諸善萬行を修して、往生を願ひ求むるものに、往生を印可せらるゝ本願である。彌陀の本意は勿論他力信心にあれども、たゞその一道のみを開いてあつては、他力信心に住し能はぬものがあると、救済の埒外に逸して了う譯であるから、方便を廻らして、自力の諸善萬行をも洩らさじと誓ひたまうた、このお誓をきくもの、そこに力を得て自力の修行にとりかゝるが、さて、やつてみると、なか／＼容易の業ではないことに氣が着いて、遂に自力をすてゝ、他力の第十八願に歸入するやうになります、その中途にあるのが、第

三願轉入

二十願である。最も衆生の根機は一概すべきものではないから、ざつと區別するならば、

- イ、第十九願より、第二十願を通して、第十八願に入るもの、
 - ロ、第十九願より、直に第十八願に入るもの、
 - ハ、今生では、第十九願若しくは第二十願の信仰に止まり、來世化土往生の後、眞實報土（第十八願の信仰に住して）に往生するもの、
 - ニ、第十九願も、第二十願も經ず、初より第十八願に入るもの、
- の四種に分れ、(一)の場合を除き、他は漸進的であります、之を三願轉入と名付けられ、大多數の人の、信仰が開展する順序を説破せられたものであつて、今こゝのお言葉は、(ハ)の場合について「邊地に生じて、うたがひのつみをつぐのひてのち、報土のさとりをひらく」といはれました。
- 四、第二十願は、念佛を唱へたる功力を募り、之を佛に廻向して、往生を願ひ求むるものに往生を印可せられる本願である、念佛は、諸善萬行よりも、易くして勝れたる事を知りたれども、未だ自力疑心が全然除かないために、その念佛を自力の行にして、されど佛の大悲はかゝる者をも捨て給はずして、助けんと誓ひ給へるのであるが、これ亦佛の本意にあらず、方便の意なることは、彼の第十九願の場合と變りがない。夫故、
- イ、第二十願より、第十八願に入るもの、

ロ、今生では第二十願に住まり、來世に於て、化土より報土に轉生するもの、あることも、第十九願の場合に同じことである。而してその第二十願の信仰に入るまでに、(イ)第十九願より進み來るものと、(ロ)第十九願を抜きにして、直に第二十願の信仰に入るものとの二種あることも想像することができません。

要するに、第十九願第二十願第十八願を一聯して味へば、自力より他力に進む主觀の經過が佛の本願の御手廻しによるものであるといふことが分り、私共の未だ絶對他力の信仰に住してゐなかつた間も、矢張り、他力の大道を進ませて頂いてをつた事を、有りがたく思はねばなりません。他力の大道を歩いてをり乍ら、他力を氣付かぬ間が第十九願で、他力には氣付いて來ても、未だまるきり他力に任せざる心になれない間が第二十願であつて、之を分類すれば、左の如き順序となります。

第十九願 全く自力の往生

第二十願 半自力半他力の往生

第十八願 純他力の往生

五、かゝる三種の門を開かれたのは、全く根機の不同を洞見したまうたからである。夫等種々の根機を、三類に分ちての説明が、次の三機であります。三機とは第一邪定聚の機、邪は正路を脱し、まがりなりに見るの意義で、他力を他力と見ることができぬやうな自力の機執の深

い者の事である、それでも佛方便の教意を味はうてみると捨て給はぬから、定聚と申して、救はるゝことに定められた人聚であるといはれます。第二の不定聚の機は、邪にあらす、正にあらす、その中途をあらはすを不の意義とします、謂ゆる半自力半他力である、之又御見捨てがないのを方便の教意とします。第三の正定聚の機は、他力を正當に理解し、本願の大道を、大手を振つて濁歩するものといふ意味である。されば邪と不とは、貶稱で、正は讚辭であり、又邪から不に進み、最後に正に入るの順序を示された事にもなりますが、何れにせよ、如來の大悲はお洩らがなく、謂ゆる定聚であることを、感謝せねばなりません。

六、次に三往生は、かゝる三機の、落ち着く先を、分ち示されたものであつて、まづ雙樹林下往生とは、化土往生を喻であらはされたのである。眞宗では、應化身のまします淨土を化土とするのであつて、應化身と云へば、私共の知りうる範圍では、釋迦佛である、然るにその釋迦佛は、沙羅雙樹の下で涅槃に入りたまふたことは、みな人の知るところであるから、雙樹林下といふは、私共の知れる釋迦佛涅槃の事蹟を例とし、化土往生を喻へあらはされたものであります。それから難思往生とは、これも矢張り化土往生ではあるが、第十九願の機の生るゝ土よりも一步を進めた結構な土である、然れども、第十八願の機の生るゝ如き、不可思議の淨土に劣つてをるから、難思議に簡んで、但に難思といはれたものであります。さればこの三往生の名にも亦、自ら貶と讚との意味があらはれてゐます。

七、次に三門の中、初の要門とは、肝要なる入り口の義で、第十九願は、自力諸善の機が救はるゝ、肝要な入り口だからである。又、眞門とは、眞實に到る入り口の義で、第二十願は、もう一息で眞實の證に入るところの門だからである。又、弘願門とは、弘く十方衆生を、ことごとく救ひ給ふお慈悲の門の義で、第十八願の絶対他力である。この第十八願のお慈悲が方便の教意として、第十九願にあらはれては、自力諸善の機を救ひ、第二十願にあらはれては、自力半他力の機を救ひ給ふ、本店と支店の如きものである、されば第十九第二十兩願は、或部分の者を救ふのに對し第十八願は、一切の機を救ふころ、弘願の稱ある所以であります。

八、已上のべたる所の、第十九願を土臺にして、釋尊が、邪定聚の機を導いて、雙樹林下の往生を得しめる要門を、説きあらはし給ふたのが、觀無量壽經である。

臨終現前の願により、釋迦は諸善をことごとく、觀經一部にあらはして、定散諸機をすゝめけり。

又、第二十願を土臺にし、不定聚の機を導いて、難思往生を得しめる眞門を、説きあらはし給ふたのが阿彌陀經である。

果遂の願によりてこそ、釋迦は善本徳本を、彌陀經にあらはして、一乘の機をすゝめける。

又、第十八願に基いて、正定聚の機を導いて、眞實報土の往生を得しめる弘願門を説きあらはし給ふたのが大無量壽經である。

九、三々の法門の概要はかくの如くである、これによつて、佛の救濟の手が、如何に廣くもろくの衆生の上のばされてあるかを知ることが出来ます、如何なる衆生でも、此世でできねば來世、來世でできねば來々世、來々世でできねばその又來世、といふやうに、幾度にも救濟の網を張つて、逃して下さらぬ仕掛を、かやうに讃嘆せられたものである、これ實に、親鸞聖人が、よく、本願のお心持を、自分の入信の逕路の上に味はれた法悦の告白であつて、同時に又、私共の求道上の事實であらねばなりません。私共は、親鸞聖人の如く、聖道自力の六ヶ敷い修行の經驗を持ちませんが、又、必ずしも何時から何時までが第十九願時代で、何時から何時までが、第二十願時代だと、明了に、自分自身の信仰の進轉を意識する事もできませんが、兎も角、今の信仰状態にまで、お育てを蒙つた事實を解くには、如上三々の法門を以てしなければ、他に解き様がありません。大きなく他力の大道の上を、かうして歩まして頂いてをる 私共は、たとへ一世や二世ですぐにお慈悲を聞くことができぬまでも、最後には、屹度お慈悲に目醒めさせて頂くのであります。されば私共のすることなすことすべてが、みな、お慈悲へくと進む、道中の仕事であると思はねばなりません。疑ふ事も、逆らうことも、大悲路上の遊戯にすぎません。

一〇、世の中には、幾ら聞いても、幾らきいても、お慈悲がいたゞかれぬと悔むやうな人もあるが、开な人も、やはり目には見えねど、幾らかづゝ、お慈悲に近づきつゝある事を疑うて

はなりません。又、一時は非常に有りがたかつたが、今では、頓と御恩がよろこばれぬと慨く人もあるが、その人も、矢張り一歩々々、如來に近づきつゝあるのであります。それどころか、親鸞聖人は「信順を因とし、疑謗を縁とし、信樂を願力にあらはし、妙果を安養に顯はさむ」(化土の卷)とさへいはれ、信する能はざるものは、謗れ、順ふ能はざるものは、逆らへ、これまた如來に近づく一手段であるぞよといはれました。いづれにせよ、私共は、如來へ、如來へと、進化しつゝあるのであります。

恵みに充てる世界

一、「信心の行者すくなきゆへに、化土におほくすゝめいれられさふらふを、つゝにむなしくなるべしとさふらふなるこそ、如來に虚妄をまふしつけ、まひらせられさふらふなれ」はじめから他力のまるだすけと聽聞しても、それをまうけにするものは、寧ろ少いのである、よく因縁の熟したものならば、すぐにそのまゝ受け取つて、他力の信心に入ることができけるけれども、大概の人は、矢張り自力でないと、物足らぬやうな心持がする、それ故、親鸞聖人の讚に、

報の淨土の往生は、おほからずとぞあらはせる、化土に生るゝ衆生をば、すくなからずと教へたり。

といはれました。この和讃は、眞實の信仰を頂くものが少いから、眞實報土に往生するものは

まことに稀である、大多数の人は、眞實の信仰に住し得ずして、化土に往生するのである、といふだけの意味であるが、今、このお言葉に對照してみると、その化土に生るゝものも、如來から、方便を以て、導いて入らして下されるので、もしそのお導きがなかつたならば、化土へさへも生るゝ事ができぬのであります。如來のお思召では、どうかして、せめて化土までなりとも、引張り込んでさへおけば、その上は自然に心眼を開いて、眞實報土に到るやうになるからどうしてなりとも、如來に近づけておかうと思召されるのであります、これすなはち、前にのべた第十九願第二十願の設けられた所以であり、釋尊が觀經や阿彌陀經を、お説きになつた譯であります。かやうな次第であるからして、化土に往生するのは、それだけ如來に近づくことになるのを、この當時の人は、地獄におちて了うのだなど云ひふらすのは、以ての外の間違と云はねばなりません。

二、にげることにかゝつてをる私共を、逃すまじと引とめて頂く相が「化土におほくすゝめいれられ」るとある、お言葉の意味である、衆生が、自發的に、自力的な信仰を起して、化土に參つて來るのを、ちやんと待つてゐるやうな呑氣な佛ではありません、なげやりにしておいて下さつたなら、いつまで經つても、行一つも、念佛一つも、修するほどの奴ではないのをあゝもし、かうもし、手をかへ、術をかへて、やうやく自力的な信仰でも起すやうにして下さつたのであります。さうしてみると、眞實の信仰に住したものはかりが、他力のお育に預つて

をるのではありません、自力疑心のまゝで、矢張他方のお育に浴してをるのである、否な、當に自力疑心のものばかりではなく、佛とも法とも知らぬ奴までが、みな、他方のお育に浴してゐるのでありますから、十方の世界の如何なる衆生の上にも、如來の恵みの及んでゐないところは、少しもないのであります。

三、盡十方無碍光如來といふ御名は、かゝる如來の御恵を、最も適當に云ひあらはしたものであるやうに思ひます。私は曾つてこんな風に考へたこともありません。本願に十方衆生と誓はれ、成就文に諸有衆生と説かれてゐるのは、つまり佛の理想の如何に廣大なものであるか、佛の慈悲の如何に普遍的なものであるか、を喻へあらはしたまで、事實のそれに伴うか、伴はぬかは、別問題であらうと思ふたのでありますが、だん／＼かういふお言葉などを透して、私の過去の考が、甚だ至らなかつた事を感ずるやうになりました、と云ふのは外ではありません、事實、如來のお慈悲は、現に、如來に背いて、にげ腰になつてゐるものまでも、一度は一度はと、引張よせて、遂に救ひの網の中へ入てくださるのでありますから、その事實のありのまゝを嘆じられた名が、盡十方無碍光如來であると、思ふことができるやうになつたのであります。

四、私はこゝで、少し、如來の光明なるものゝお働きをのべて、前述の意味を補ひませう。そも／＼光明は、如來のお慈悲のお働きを、この世の光に喻へられたものであります、そ

こでまづ、此の世の「光」の働を吟味してみるのが先決問題です。それでは、如何なる働が此の世の「光」にあるかといふに、第一は調へ熟せしむる作用、第二は闇を破る作用、第三は永く保存する作用であります、如來のお慈悲にも亦たかくの如き三作用があるから、そこをこの世の「光」にたとへられ、光明と名けたまふたものである。

- 第一、如來のお慈悲は、一切衆生の根機を調へ熟して、開法の縁を結ばせて下さる。
- 第二、法を聞くものをして、疑ひの無明を破し、信仰の明に入らせて下さる。
- 第三、入信の機を攝取して、如何なる事があつても、再び迷はぬやうにして下さる。

この三作用を一括してのべられたお言葉は、口傳鈔の第二章である。

もし光明の縁もよほさずば、報土往生の眞因たる名號の因をうべからず。いふこゝろは、十方世界を照耀する、無碍光遍照の明朗なるにてらされて、無明沈没の煩惑漸々にとらけて(已上調) 涅槃の眞因たる信心の根芽わづかにきざすとき(已上破) 報土得生の定聚のくらゐに住す(已上攝) すなはちこのくらゐを光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨とらとけり、また光明寺の御釋には、以光明名號攝化十方但使信心求念ものたまへり。しかれば往生の信心のさだまることは、われらが智分にあらず、光明の縁にもよほしそだてられて、名號信知の報土の因をうとせるべしとなり。これを他方といふなり。

五、さて第三の攝取作用を、又、三つに分けて味はうことができます。

歎異鈔講話

第一、閉塞作用 御文章の二帖目第四通にいはれてある通り、五道六道などの、悪趣におも

むくべき道を、閉ち塞いで下さる。

第二、送付作用 極樂浄土へ送り届けて下さる。御文章の二帖目第七、第十の兩通にこの意

味がある。

第三、與徳作用 種々さまざまの功德を與へ給ふことで、御文章の四帖目の第六通に、「八萬

四千の大光明のなかに攝取して、往還二種の廻向を、衆生にあたへまします」とある

り」とあります。

六、前の三作用にこれらの三作用を加へるといふと、六作用となる、今、この六作用を破徳

と満徳に分つならば、調熟作用と破開作用と閉塞作用とは破徳であつて、攝取作用と送付作用

と與徳作用とは満徳である、前者は則ち消極、後者は則ち積極で、打つ手と、撫る手とであり

ます。

七、左に掲げる二三の事實は、近頃私が見た新聞や雑誌にあらはれたところのもので、恐らく諸君の記憶にまだ残つてゐることであらうと思ひますが、私は、是等の事實の上に、如來の御方便を諸君と共に味はひたいと思ひます。

第一 山田憲の改心法悦

九條公爵家の奥女中山地うしといふ老女が、近所の河島病院の月次法話の席上で同和學園の

北村致嚴師から「山田憲及び彼の周囲の人には信仰がなかつた、それが憲をしてかゝる行爲を遂行せしめた所以である」と聞いて大いに感激し、憲の身代りに立ちたいといふ歎願書をその筋へ出した事は、當時の東京朝日紙上で傳へられた。その歎願書とは、

御手紙を以て御願ひ申上奉ります、御法談中に、教誨師様が、教育地位ある者が、なんで恐ろしい犯罪を犯したかとの御尋ねの時に、山田憲の答へに、「佛教佛様と云ふ觀念が、私にありましたなら、こんな悪事も致さなかつたでせう」と申されましたので、憐れ不憚に思ひ、わたくしはつんば無教育で役に立ちませんやつなれど、大い限りない大果報者にさして頂き、日本國に生を受け、畏れ多くも天子様の大恩に預かる身にさして頂き乍ら、國の爲め法の爲めに盡しませんで………實に残念に思ひ、山田の大罪人の身がわりに、私を死刑辯にあつかり度く存じます。山田の親妻子、あはれかわいそうでたまりません、一人たりとも誠の信心決定なさいましたら、第一恐れ多くも佛様天子様への大報謝、私山田のかわりに死刑頂きまして、山田をお助け下さいましたら、必ず善人に生れかわりまして、鈴辨の死體にお詫申上げて、國の爲め法の爲め御盡し下さいませうから、私を山田の身がわりに立たして頂きましたら、此上もなく大満足、感謝奉ります、必ず早速此手紙のおもむき、恐れおほくも御上裁判へ訴へて下さいますやう御願ひ申上奉りますのでございます。

山地 う し 〇

御上裁判様へ

この文中にもある通り、山田の犯罪は、無信仰から來てをると、山田自身が告白してをるやうですが、一方、山田は果して开な告白をしたであらうかといふに、山田の知人鷹取萩女史の談が一月の「道友」に掲載してあつた、鷹取女史は曰ふ。

歎異鈔講話 (西谷順誓)

自力の本尊釋然として他力に歸す

山田憲さん「すか、先立て獄に投ぜられてから、まだ一度も面會はいたしません、然し教師藤井様とは二三度お會ひ申しました、そして憲さんの事を聞きました。憲さんの申されるには、私は宗教といふものはあまり必要なものではない、宗教は弱者や病人の隆れ場所であると思つてゐました、先年印度の方へ参りました時に、佛跡を通りましたが、然しその時に佛に對して何等敬虔の念もおきませんでした、然し只今になって、宗教は人心の改造、正道を行く道しるべであることに気がつき、それで只今はこの獄中に居て、先年のあの佛跡を通つたことを思ひ出し、心の中で参拜してゐます」といふのでございませぬ、憲さんが今は宗教の必要を感じて、轉迷開悟の道を辿つて居られることをよろこんでゐます、殊に先日已來佛書の差入れに對して、次の手紙を下されたので、大變よろこんでゐます。

十一月四日

鷹 取 様

憲

拜

無信仰が原因して重罪を犯した山田が、かういふ法悦生活に入ることのできたのは、實に意外の幸福と云はねばならぬ、されど既に心眼の開けた彼れに於て、必ずや如來方便の教意を味はひつゝあることであらう。山地うし女の歎願は達すべくもないが、山田の肉體はよし斷頭臺上の露と消ゆることも、彼の生命は、永遠に滅びることはありません。

第二 田澤澄子の入信徑路

「出獄して西宮の實家に歸つた姑斬りの女優澄子」といふ見出しで、大阪毎日紙上に連載された田澤澄子の入獄から出獄までのあらましは、勿論諸君の記憶に新たなことであらうと思ふが

同記事にあらはれた彼澄子の入信の徑路こそ、實に味ふかいものである。一たい彼女はかゝる恐るべき罪を犯した女であるにも拘らず、もと基督教の信者であつたさうであるが、八王子の女監に在監中、遂に他力の信仰に入つたのである、之について同記事の冒頭に記者はいうてをる。

昔日の耶蘇信者が今日の彌陀信者

母親高子と田澤夫人と二女の妹が、糸目切れた憐れな小風のやうに入つて來た澄子を見るに、玄關の四疊半へ上るのも待たずに、黙つて泣きついた、澄子は「申譯のないことをなしました、赦して下さい」といって、弱つた母親の胸に顔を付けて、暫らく泣いてゐた、「私を佛問へ件について下さい、佛様の前につれて行って下さい」と澄子は云つた。お燈明の點いたお佛壇の前で、崩れた髪をした澄子は、監獄細りのした手を殊勝に合せて「歸命無量壽如來、南無不可思議光……極重惡人唯稱佛、我亦在彼攝取中……」と正信偈を唱へました、そして全く基督教者だつた澄子が、どうしていつの間にかこんな彌陀慈光中の女になつたのだらうかと、背後に坐つてゐる母と妹をして、肝を潰さした。

といつてをる。今、断片的に同紙に載せられた澄子の感想懺悔録を辿つて、彼女の入信徑路をたづねてみると、

私は讀まして頂いた親鸞聖人傳の中の、熊谷蓮生坊が宇都宮頼綱に、馬上より唾を吐きかけられて、一時はむつとして立上つたが、念佛申して「かゝる者をこそ助けねば」と落涙したといふ處が、非常に私に感動を與へた事を思ひ出して忍びました、出來ない時の堪忍、これが出來ぬため、今この境界に沈んだ私であらうから、この人の中で、どんな苦痛も迫害も忍耐して、これを習性としてしまはねばならぬと決心致しました。……種々の辛い目を見る度に、私はこゝが蓮生坊と思ひまして、忍耐をし通し、例の庚申さま(彼女が入獄當時或老女囚からお前さん一日も早く人間の姿

婆へ還りたいならば、獄内では「見るな」「聴くな」「云ふな」の三ヶ條を堅く守る事だぞ教へられ、爾来いつも之を守つて遂に彼女は八年の刑期を四年で假出獄となつたを守りましたが、何も云はれただけに、私の内心は一層辛うございまして、しかし段々教誨を頂きますうちに「たゞ一罪業は深くとも必ず彌陀如來は救ひ給ふべし」といふ事が非常に有難く感じまして、その後御文章を拜讀の時は、涙の出ない時はありませんでした。

獄中生活の辛さを蓮生坊の事蹟に引きくらべて、忍ぶことのできた間は、まだ、彼女の信仰生活の第一期で、その後彼女は日夜自分が犯した罪狀を悔悟すると共に「自分の如何なる時でも如來は決してお見捨てにはならぬ」といふ事を感ずるやうになり、自分が犯した姑斬りといふ恐ろしい罪の上にさへ、如來の救ひの御手が垂れられてをつたと味うことができるやうになりました。

それで私は切實に感動して、有難く思つた事は、同監に三人の女死刑囚がゐた事でした、……あんなに毎日アテにもならない事を唯一の頼みとして、生きんと希つて居り、また死亡といふものを向ふに見ながらも、一日々々生きてゆかねばならぬその悲痛な心持を考へるに、私はたまたま同情悲哀の念に驅られない譯にはゆきませんでした、而も而も、その死が来たのです、その死が来たのです。……あの女は一度呼び出されたら、もうそれが最後なんだ、一寸外の用事で役人がお呼びになつても、あの女達は、その度に實際顔色を變へて、びくつきする様子だったので、私は必々氣の毒に堪へない心持がしてゐました。それと共に私は、いつも身の毛を竦立て恐ろしい思ひをしたのは、若し私があつた事を演じた時、姑の命に關係したならば、自分も當然この三人の女達と同様な身になつてゐる筈である、何にしても、姑の命のあつた事は、私にとつてもどんな徳伴であつたか知れない、これは必定如來様が、自分の手を留めて下さつたのに相違ない、一寸一突當り處が悪くても死ぬものなのに、かなり多くの箇所を傷けたにも拘らず、姑の

隣室の死
刑囚を見
て自己の
幸福を感
謝す

生命に川條のなかつたといふ事は、何よりも有難い事である。私は深く佛恩を奉謝いたしました。自分がかういふ風にして、知らず知らず、他方の大道を歩まして頂いてをつた事に、氣づかせて貰つた彼女は、實に仕合せであります、その後彼女は、自分のしただけの罪の重荷を、すっかり卸して了つて、樂な日暮をするやうになつた。

自分のため、姑始め兩親達にも、苦痛や様々の業因を作らしてゐる事は、誠に濟まないと思ひました、御信心を頂いてからは、もうすつかり氣が樂になつて、姑を恨むといふ心もなくなり、何となく氣の毒に思はれず、現世では必ず快く宥して下さるでせうが、次生ではキツとお詫をさせて頂けるものと、私はそれを樂みに致して居ります。それから夫の事も、今日となつては、私は全く諦めました、唯幸福な生活をして下さればよいが、そればかり思ひます、私もこの信心を頂かないうちは、ヤハリ女優にでもなつて、思ひのまゝに放縱な生活でもして見やうかといふ心持を出した事もあり、自分の姿がやつれた事を悲しんだりした事、あつたのですが、實に恥かしい事でした。

私が斯うした心は、獄内でも大いなる事が忍び得るやうになりました、夏の煎られるやうな暑い時、冬の身を切るやうな寒さの折でも、祖師の御辛苦や、兩親の歎きを思つて、私はお念佛を唱へて、それを忍耐し得ました、雪などの降る日は、御開山が御旅行中、越路の雪に患んだ事を思ひ、嵐の日には、蓮如上人の叡山御修行の苦難を偲びまして、私は、私より以上の苦しみを經た人々の身の上を考へて、何事にも忍耐し得ました。

かくて彼女は、何事につけても、如來の御恩と、自分の仕合せとを喜び得るやうになつた、開して彼女は自分の日常の仕事を通じてでも、宗教より外に自分の心の垢を拭き去るものはないといふ事を感ずるやうになりました。

先日、先日の事です、機臺の垢を落せよ、お取締から申しつかりましたので、私は難由でそれを拭いて見ましたが、永らく垢

萬事に佛
恩を

に染んであるので、何うしても落ち込んで困りましたが、薬を少し頂いて、それで洗つてから、舞なく取れましたが、その薬でも暫らく水に浸しておかれば、よく垢を落す事が困難である事を實驗したので、私はその時、其の薬を手にして機蓋を擦りながら、非常な怒に打たれたのです、それは私の如き重き罪惡の垢は、倫理や講釋の雑巾では、トテも落ちない事です、それが如來のお誠によつて、初めてきれいに除き得ます、けれども先づ心を法水に浸さねば、早くその罪業の垢を除く事はむづかしい事を痛感しました。

彼女をかゝる尊い信仰に導いたのは、淳信にして人格と熱情とを兼ね備へた佐藤教師の力によるは勿論であるが、彼女もそれについては満腔の感謝を捧げ、

私は佐藤先生といふ方は、私達の生みの親よりも尊い、愛の化身、佛陀そのまゝの方だと存じて居ります、先生は、如來さまそのまゝのお方で、私は全くこのお方の爲めに、靈も身も救はれました。

と云つて居る、併しさういひつゝ、彼女は、自分の信仰生活に罪より懺悔に懺悔より感謝に感謝の一切を如來のお手廻、方便と味はうてをることは、その感想録の最後に記された一首にも充分あらはれてをります。

去年までは、よそにすごせし、今日の日を、いはふ心も、彌陀の賜もの、

第三 神近市子の獄中通信

は婦人公論の新年號に載つてをつて、多くの新年の讀物の中で、最も私の興味を惹いたもの一つです。九ポイント四十餘頁の長篇で、二十五信に區切り、通信とは云へど、内容は頗る豊富なものであつたが、全篇を一貫したところ、「監獄は恵みの門」といふ思想である、特に

監獄は恵みの門

よくあらはれてある所を、二つ三つ引きます、先づ第十一信に彼女は、牢獄といふものゝ存在する理由を語つてゐます。

今朝の食事を持つて来た時、百五十六號がかう云ひました。「いやよ、あんたは私の顔を見ては、ニヤ／＼してゐて。」
「御免なさい、けれど、それが何か悪いの？」
「悪くはないわ、だけれどニヤ／＼しては妙だからさ」「どうして？」
「辛くて、辛くて、厭になつちまう、毎日々々ね」「仕方ないさ、諦めるさ」「諦め様にも諦められないわ、あんたなんか直ぐだから好いけれど、私なんかあさがもう十二年、お婆さんになつてからしか歸れないわ」
享樂の多い青春が、徒に費されたる！この考ほど、囚人達を焦々させるものはありません。その點から云へば、人世を一わたり歩いて了つて、子や孫から顧られず愛されずに、小さな盗みなどして入つて来る老人達は、割に平氣なものであるかも知れません。社會に住ふこと、牢獄にゐること、の相違が、五十歩百歩の差に過ぎないでせうから。けれど若い人達には、快樂と苦痛の差が實際にある以上、大きく思はれるので、焦々した氣持を起すことは、無理もないでせう。けれど又一方で、命の後に命が有り、存在のあとに存在の來ること、そしてこの生命と、あの生命と、相應じ相牽引するものであると云ふ眞理を、考へてゐる時ほど、囚人達が牢獄から解放されてゐることはありません。この時だけ、嘲けられ、罵られ鞭たるゝこの生活が、王宮の生活の様に、感謝をもつて、愉快に送り迎へ出来るのです。又この時だけ、私には明かに、牢獄と云ふものゝ存在する理由が分つて來るのです。「監獄がなかつたら私はどこへ行つたでせう、地獄より外には、行き所がなかつたでせう。ね、それを考へると、監獄があることば、私の爲めであつた様な感じがします。私の様に悪いことをしたものが、罰せられると云ふことがなかつたらう？ 私は只だそれを考へた丈だけでも、ソツとします。」

命の後に
命存在の
後に存在

第十四信に彼女は、天地の大きな恩恵を讀んで、宗教と結び付けて次の様に云ひました。

床の上につき上つて、鐵格子の嵌つた縁側からさし込んで來る、キラ／＼と光る日光を眺めてゐると、私は、歡喜の

天地の偉大な恩恵

第二十二信には、「基督教から佛教へ」の彼れが信仰の轉化を簡單に語つてゐます。

「天國をさる爲めに、私は何をしたら好いでせう?」これが、私にさつては大きな疑問でした。佛書や聖書や神學や、凡てが私に念佛をすすめます。況して神は晝夜祈る所の、選びたる者を久しく忍ぶとも、終に救はざらんや、我なんぢらに告げん、神は速かに彼等を

信仰の轉化

救はん。(路加傳十八章)

「恒に様々の祈りと願をもて靈によりて求め、……祈りて倦ざるべし。(以弗所書六章)」

「みな心を一にして阿彌陀佛を深くのみ奉るべし。その他には何れの法を信すといふとも、後生の助かる云ふこと、ゆめくあるべからず。(蓮如上人御文章)」

そして私は始めて、念佛を始めました。私は以前基督教の教を聞いて居りましたから、祈禱と云ふことには、少しの經驗を持つて居ります。けれど、祈禱を味ひうるほどの、熱心を持ち得なかつたし、又それほどに、祈禱の意義を尊ぶ理由を云ひ聞かされもしませんでした。その爲めに、自然祈ること遠ざかる様になり、祈禱を忘れた時、宗教を失つたのです。ですけれど、今念佛を始めた時、私には全く異つた情熱と、智識の充實があり、よるこびと感謝の思ひに、こみ上げて来る涙をのみ込みながら、念佛して居ります。

第二十四信は、彼女が念佛に救はれた摺梅を、可成り詳しく書いてゐます、少しながくなりますが、恐らく茲が全篇の中心であらうと思ひますから、厭はず引いておきます。

極重の悪人も唯だ佛を稱すれば、

我亦彼の攝取の中に在り、

煩惱眼を障へて見たてまつらすと雖も、

大悲倦きことなくして、常に我身を照し給ふ。

私は、今自分が完全に救はれたのだと云ふことが、深く感ぜられます。あなたは、救ひの働きの不可思議なことを、今の私ほど深層にお感じになることは出来ません。あなたは、恐らく地獄の底にお沈みになったことがないでせうから、極樂の臺上に救はれて生るゝよるこびをも、お持ちになることは出来ません。私は今、そのよるこびに居ります。地獄に落ちたことは、今日極樂に生るゝ爲めであつたことを考へれば、私は地獄を通つて居つた時にすら、大悲の止み難

い力の働きに守られてゐたのだと云ふことを、考へずには居られません。過去の私の凡ては、誤りであつたのです。怨んだことや憎んだことや、誹つたことや妬んだことや、それらが凡て過であつたことは勿論ですが、愛したことも又實に大きな過でありました。今日私は過つた謙虚な心持で、人と神との前に、それを詫びなければなりません。

念佛は仰せられます。「お前は自分の慾望に従ふた時、頗る自分が正直だと云ふことを云ひ隠した。お前がほんごに正直で大膽であつたなら、お前は慾望に従ふより、何故良心に従はなかつたか。良心に正直に従ふ時、それは徳であり勇氣であり生命である。慾望に従ふ時、それは不徳であり臆病であり死である。そしてお前は卑怯にも慾望に従ひ乍ら、自由を失つてそれを恥ぢることを出来ないうで、自分達が正直であること云つてゐた。」

念佛は、又仰せられます。「罪は單獨で来ることはない、お前は邪淫をして居り乍ら、他の行爲では自分の良心が生きてゐることを疑はないでゐた。何といふ無智な話だ。一戒は十戒であり、十戒は一戒に攝されるぞ。一戒を缺いたら、お前の全人格は墮落したものであり、一戒が見事に守られて居れば、お前は十戒を全うしてゐるのだ。」

念佛は、又仰せられます。「回心懺悔せよ！死ぬことが厭であつたら、回心懺悔せよ。過失を過失と知つて改める時にはそれはもう過失ではない。過つて改めることが出来ないものが、過失である。何の躊躇することがあるか。永遠に死ぬことが、怖ろしければ懺悔せよ、回心せよ。又生かされることは必定だ。回心して、淨土に受け入れられないことはない。その爲めにこそ、大悲の久遠劫來の小止まない活動があるのだ。」

再び、念佛は仰せられます。「あやまれ！地にひざまづき、土を涙で潤して詫を云へ！その人から夫を奪ひ、家を奪ひ、安全を奪つたあの婦人に詫を云へ。私は、あなたの前に死に償するものでムリです。私が今生生きてゐると云ふことは、冥加の怖ろしいことでムリです、私の餘つてゐる生涯をつくして、あなたへ詫言を云はして下さい、と。傷つけやうとした生命に詫を云へ！

あなたの命は、只だあなただけの命ではないことを、私は今知りました。あなたを憎み、こそすれ、私はあなたの生命を憎む理由は、ごにも持ちません。私の無智であつた爲め仕でかした過を許して下さい、と。

世の人に詫を云へ！
私の無智と病氣とから、私はあなたの方の仲間の數人を苦しめ、あなたの方の負擔によつて、で罰して頂いて居ります。相済まぬ次第です。どうか私を許して、こゝを出て歸つて後、あなたの方への義務を感じてその賠償を努める一機會を與へて下さい。」

又、念佛は仰せられます。「お前は、これらのことを遂行することを、私に強ひられる厭な事務だと考へるだらう。けれど、魂の上に眼を醒せ、魂の上に眼を醒せ。お前が厭な義務、利他主義だと考へる此思想は、眞には此上もない利己主義なのだ。これは他人の爲めではない。只だお前だけの爲めなのだ。これらの厭な義務を果されば、お前は死ななければならないのだぞ。例へ世の凡てを得ることも、人その命を失はせ、何の利益あらんや。強情であるさか、瘦我慢が強いさか云ふ名譽を山程貫つても、自分の生命に輝が入つては、結局その山程の名譽を樂しむことは出来ないぞ。」

長い間、私の心の中では、念佛に對する抵抗が行はれて居りました。私は時とすると、念佛をスツカリまかしてやつて、自分が勝つたことを意識することがありました。けれど、又何時の間にか、それが直ぐに頭をもたげて来るのを見ては驚かされました。そして長い争の後で、さうく念佛に凡てを支配させやうと云ふことを決心しました。

今はもう、靜かで平和です。(已上大正九年二月稿)

第二十一講 今生の施物と來世の得脱

第十八章の概要

一、今章に於ては、尊い如來の教を、商品として取扱うてゐる、職業的宗教家に痛棒を加へられたものであります。私共に直接關係が深いゆゑ、種々の點から、之を味はうてみたいと

思ひますが、先づ一章の文の當面について申すと、佛法僧の三寶に對して、物質的に、手厚いお取持を、するとせぬとでは、それが未來までも影響して、若し手厚いお取持をしておいたなら、大きな佛、すぐれた佛、偉らい佛になることができるのであるが、若しお取持が手厚くないと、小さなつまらぬ佛にしか、なられないと云ひふらすものがあつた、然るにこれは自分の私慾を土臺にした御都合主義の議論で、間違つた考であることは勿論、苟且にもそんなことを、人に向つて宣傳してはならないのである。にもかゝはらず、かやうな考をもつたり、人に宣傳したりするやうなことがあると、比興(非興の誤り歟)のことである、興が醒めて了う、風上には置けない話である。

二、一たい佛のお體に、分量をきだめて、大い佛さまだの、小さい佛さまだのといふやうなことを考ふべきものではないのである、それでも觀經を拜讀すると、明かに、佛身の分量を六十萬億那由他由旬とお説きになつてあるではないかといふものもあらうが、あれは彌陀のお證のその儘をいはれたものではなく、差別の世界に在つて、差別の見解よりほかに有つことのできない私共凡夫に對して、わかる様にどかれた方便報身である、私共が眞實の信仰に住し得ずして、未來化土に往生したなら、矢張りかやうな佛様を拜むのである、併し眞實報土で拜まれ給ふ佛さまは、無色無形であつて、大小の分量を定めうべきものではない、然るに當時一部の人が言ひふらしてをる邪義の如きは、施物の多少によつて、拜む佛さまに、大小の分量が

私欲を本
とす

分れるといふのは、そもく、何によつていふのであるか、さらに心得がたいところである。これ彼の邪義の根本的に誤つてをる所以である。

三、どころがこゝに一つ、見やうによつては、そんな風に見ても見られぬことはないとおもはるゝ據がある、それは自力念佛の人が拜むところの化佛を説いて、大念には大佛を見、小念には小佛を見、といはれてある經説である、けれどもこれは元來自力念佛に關する所説でこそあれ、施物とは全く無關係である、無關係ではあるが、何か爲にしやうと思ふ者にとつては、一寸よいかこつけ場所であるから、こゝへひつかけて、あゝいふ邪義を唱へ出したものであらうと思はれる、左様な譯であるとするれば、單なる誤解でなく、故意の誤解である。

四、前にのべた如き、單なる誤解でもなく、故意の誤解でもないとするれば、布施の行だともいうて云はれぬことはありますまい、若し純乎たる布施の行ならば、そもく結果を期待するのはあやまりである、幾ら施しをしても、信心が頂かれてないならば、駄目である、その代り信心頂きさえすれば、財物の喜捨などはまるで問題にはならない、たゞ深信者を救ふの願意であります。それであるから、眞劍になつて、施物をたのむやうなことは、まことに馬鹿々々しいことである、全く理由のないことである。

五、それでこの頃唱へられてゐるやうな施物だのみの邪義は、大凡上述の理由(一)誤解か、(二)故意か、(三)眞劍か、のいづれかであらうと思ふのであるが、いづれにせよ、そんなことを云ふ

者の腹の底は、自分の生活上の私慾を土臺にして、さも施物といふものが、未來の御助けに關係する如く吹聴するのである、云ひ換へれば、佛法を商品とし、生活の具と考へるのが、間違の根本である。

六、私は今章を拜讀しつゝ、何もこれが六百年古の歎異鈔時代だけでなく、今も現にこのお諭を受けねばならぬものが多いのである、寧ろ今日のやうに職業的宗教家ばかりというてよい時に於いて、古已上に、このお諭の必要があるといふことを切實に感じ、まことに感慨無量であります。

例により一章の大意を圖示いたしますと、三段五節となります。

施物の多寡云ふべからず「佛法の方に」巨下……………醜陋なる施物非事

第十八章原因を数らむ「念佛まふす」巨下……………誤解か故意か眞劍か
「かつはまた」巨下……………

根本を突く「すべて佛法にこそよせて」巨下……………生活問題

醜陋なる施物非事

一、「佛法の方に、施入物の多少にしたがひて、大小佛になるべしといふこと。この條不可説なり云々、比興のことなり」施物頼みの宣傳の如何にも醜陋にして風上に置けず、また之を信する理由なきことを、先づ破斥せられたものである。然るに之を信するもの、あるは、之を

信施を受くる者の心得べきこと

宣傳するもの、あるより起る譯であるから、この一段の筆方が、正しく宣傳者に手厳しく當られてあります。

二、なせかゝることを云うてはならないであらうかといふに、私は左の四ヶ條をあげたいと思ひます。

(第一) 施物の多寡をいうてはなりません、施物は、それが讀經に對する場合たる、布教法話に對する場合たるを問はず、すべて信徒の志あつて、その志をあり難く受くべきものであるから、こちらから、多い少いを云ふのは間違つてをります。ところが實際は、なかなかさうは行かすして、たとへ口には云はぬまでも、心の中では、多かつたとか、少かつたとか思ふてならないものである、それで或昔の徳者は、すぐこの施物に、自分は手を觸れないやうにした人もあつたさうであるが、願くはお互も、常にそんな風にしたのであるけれども、そんな風にはかり行かないのであります、さうすると、どうしても凡情として、多いとか少いか思ふたり、云ふたりするやうになりますから、そんな場合には、よく、この施物の本義にたちかへり、我機の淺ましい事を慚愧し、少物をも同じ感謝の情で迎へるやうにせねばなりません。

三、(第二) 次に施物の多寡を思ふたり、云ふたりするのは、自分の生活問題に關係するからであります、多ければ、生活が樂にでき、少ければ生活が苦しい、そこで知らず／＼施物の

多寡を問題にするやうになるのであります。然るに昔から宗教家の生活は、道心の下に、自ら賜はるものと致され、道心がいあれば、生活に苦しむやうなことはない、もし生活に苦しむやうなことがあれば、それは自分に道心が足りないからであることせられてあります。そこで施物の多寡を問題にする前に、まづ自己の道心の有無を問題にせなくてはならない、それを抜きにして、たゞ施物の多寡を問題にするが如きは、本末を誤るものであるといはねばなりません。これ第二の理由であります。ところが斯様に申すといふと、それは昔の時代のことであつて、今日は、そんな風には行かないものである、殊に眞宗の寺院生活は、家族が非常に多い、而してだん／＼物價は上る、その反對に世人の宗教家に對する考も、昔の如くではない、あれやこれやで、生活はいよ／＼窮迫するのであるから、「道心」など、古くさい頭をもつてをれば、遂に餓死をまぬがれぬ、今日では、道心も必要であらうが、なほ外に生活の方法を確立せねばならぬ、といふものもありませう、私共も又、或時はそんな考を起さないでもありません。さりながら、更に一步すすめて考へてみると、私共が動もすると、その「道心」といふものを極狭い意味に解釋してをりはせぬか、如法にお念佛を稱へて、たゞ個人的に比較的缺點のない人間になることのやうに考へてをりはせぬか、かやうに考へることは、昔だとして無論正しい考へ方ではなかつたのであります。今日はなほさら正しい考へ方ではありません、人間は必ず社會的生活を必要とする已上は、今日では、昔に倍し二倍し乃至幾倍して、「道心」の意義を擴

道心の下
に衣食あり

張せねばなりません、さうしてみると、私共は、果して立派に道心的生活をなしつつあるでありませんか、自己に對し、周囲に對し、上に對し、下に對し、内に對し、外に對し、なすべきことを、残りなくしてをるでありませんか、世の中が進んでも、私共だけは、依然として、葬式と讀經に忙殺されて、何等進取的積極的の對策を試みてはゐないではありませんか、たゞ昔ながらの仕事を、昔ながらの考へてしてをつては、實は私共に「道心」を談する資格があるまいではないか、されば昔も今も、私共が、なすべきことをなすことに努力しなすれば、そこに生活問題の解決は、自らあることでありませう、さういふ意味に於て、施物の多寡をいふより前に、深く自分を反省せなければなりません。

四、(第三) 次に兎も角、現在の施物と、未來の佛果とを、引つかけて談することが、眞宗としては絶対に不可なのである。眞宗では、未來の問題を解決する鍵は、たゞ信仰にあつて存し、たとへ前三後一の助業たりと雖も、報恩業であつて、尅果の力用はもたないものである、施物の如きは即ち供養正業であつて、當然報恩業に攝すべきもので、之と未來とを引きかけて談することきは、根本的に宗旨が許さないにもかゝらず斯様なことを云ひふらす輩は、未だ宗旨を知らざるものである。

五、(第四) それから最後にたゞに宗旨を知らざるのみならず、つまり眞實の信仰がないからである、信仰とは、精神的にお腹のふくれた事であるが、お腹さへふくれてをれば、他に食

物を求める心は起らない筈であります、どんなことがあつても、往生一つは間ちがひないと、たゞそればかり喜ばしていたいき、大きな佛にならうが、小さい佛にならうが、そんなことは少しも問題ではないのである、然るに、施物の多寡と大小佛とを引きかけて、冤や角おもふやうなことは、何よりも信仰のお腹のふくれてゐない證據である。

六、已上四つの理由、いづれもまことに見つともない話である、興の醒た、いやらしい話である、志の多寡をいふこと、道心の缺けたること、宗意を知らないこと、信仰のないこと、いづれも耻づべきことであるから、「不可説」である、「比興」のことであるといはれるのであります。比興は非興に語呂が通じ、興味のないこと、いやらしいことの意味である。

誤解か、故意か、眞劍か

一、かやうに醜劣な施物だのみでも、まんざらよりどころがなくては起るものではありません、何か經典とか論釋とかに、然るべき根據をもつて起つて來てをるに相違ない、といふところから、これぞと思はれさうな據を出してみ、果してそれが據になるか否かを究められるのが、「まづ佛に」から、「願の本意にてさふらはめ」までの間でありませう。この間が自ら三段に分れ、初の一般は觀經を引き合ひに出されたものである、本文に「まづ佛に大小の分量をさだめんことあるべからずさふらふ、かの安養淨土の教主の、御身量をどかれてさふらふもそれは方便報身のかたちたり、法性のさとりをひらいて、長短方圓のかたちにもあらず、青黄

觀經に説ける彌陀の身量

赤白黒のいろをもはなれなば、なにをもてか、大小をさだむべきや。」

二、即ち同經眞身觀によるに、佛身の高さ六十萬億那由他恒河沙由旬といひ、眉間の白毫相は、五つの須彌山の如く、佛眼は四大海水の如く、全身の毛孔から放ら給ふ光明の圓は百億三千大千世界のやうであるなど、いふてある、もとより夥しい數量ではあるけれども、分量を定めてあるには相違ない、それで如何にも彌陀如來の御身量が、これにきまつてをるやうに思つてはならないのである、何となれば、この觀經のお説は、眞の阿彌陀如來のお證のまゝを云はれたものではなく、方便報身の形である、方便報身といふは、化身のことである、併し眞實のお證のまゝの佛身は、かやうな有限相對的のものではないから、大經には、單に光明壽命の無量なるを説き給ふばかりで、身量の事を云はず、彼士の聖衆のことを説くに、皆自然虛無の身無極の體を受たりといふてある、これからみると、彌陀の御身量もまたもとより、自然虛無の身無極の體たるに相違なく、到底分量を限定することができないのが、眞に近しと致します。そこで自然法爾章には、(末燈の第五章にも)

無上佛とまふすは、かたちもなくまします、かたちもましますまぬゆへに、自然とはまふすなり、かたちましますとしめすときは、無上涅槃とはまふさす。

といはれ、唯信鈔文意にも、
法性法身とまふすは、いろもなし、かたちもまします、しかればこゝろもおよばず、こと

ばもたえたり。
といはれてあります。

三、いろいろなく、かたちもない、といふことは、まるで空無なものであるといふ意味ではない、きまつた色、きまつた形がないといふまでのことである、きまつた色がないから、どんな色にでもなつてあらはれます、きまつた形がないから、どんな形になつてもあらはれます、そこで、無色といふことは、同時に一切の色があることになり、無形といふことは、同時に一切の形があることになり、その拮抗は、到底、私共の、有限差別的の智識では、臆測しうるところではありません、さりながら曇鸞大師の論註には、相即無相、無相即相といひ、一法句二十九種といはれて、骨を折つて説明してくだされたのであります。近頃出版になりました、前親下の著「極樂莊嚴」の第八章「極樂莊嚴成就の真相」の下には、手近い科學上の例など引いて、甚だ心易く、この所を説明してありますから、是非参照して頂きたいと思ひます。

四、要するに佛のお證には、きまつた身量などのある譯ではないのであるが、今所破の邪義でいふところの、佛に大小の身量をさだむるのは、恐らく方便報身の御身量を説かれてある觀經の説を、とりちがへて、かやうに申したものであらう、即ち經説の誤解であらう。

五、「念佛まふすに、化佛をみたてまつるといふことさふらふなること、大念には大佛をみ、小念には小佛をみる」といへるか、もしこのことはりなんどに、はしひきかけられさふらふ

相即無相
無相即相

擇集の大
念小念の
説

やらん」この一節は、選擇集の本願章に大集月藏經を引いて、「大念には大佛を見、小念には小佛を見る」と云はれ、その大念小念とは、如何なる意義なるかをあらはすに、懷感禪師の語を引いて、「大念とは、大聲の念佛、小念とは、小聲の念佛」といはれました、かやうなお言葉があるから、そこへはしひきかけて(こせつける)、自分の主張は、さもたしかな據のある説のやうにみせかけたのではあるまいか、といはるゝのであります。それでこれは、前の誤解よりも一層するい考であらうといはるゝので、實際古來の邪義異端者は、往々こんな手段を以て、人をあやまること少くありません。

六、私は先年九州の或地方へまゐりました際、その地方で、かういふことをいひ振らしてゐる者があるとき、ました、親鸞聖人の御傳記の中に「識浪しきりに動き」というてある、御開山でさへ自分の色慾は抑へ切ることができなかつたと仰られるではないか、まして我々末世の凡夫の事であるから、どうしてこの淺ましい心情が止められやう、かゝる奴なればこそ、如來の惡人正機の御本願がありがたいではないか、というて自分みづから素行の治らないことを少しも恥としない、世の中には、又こんなことをいうてをる者に、存外共鳴者が多くて、そんなことからなか／＼この人の人氣は偉らしい者であるといふことであつた。

七、罪の深い、障の重い者こそ、本願のお目當であるといふ他力の底を頂かずして、たゞ言葉の上だけ聴き、惡を怖れず、自己の非行辯護に如來様を使うてゐる者の如きも、亦た、

「はしひきかけ」る者の一種であります、うつかりすると尊いお慈悲を、開んな風に、悪い方悪い方に使つてなりません。

八、それはそれとして、上に引いた選擇集の文は、どういふことをいはれたものであらうかと申すに、あれは化士の證のことを申されたもので、他力の弘願念佛のことではありません、十九願二十願の自力的の念佛では、その熱心の程度で、生れた化士で拜む佛のお姿に、大小が分れるのである、そこで大集日藏經には「至心念佛乃至見佛、小念見小大念見大」と説かれてあります、この日藏經を、選擇集に、日と月とを取り違へて、月藏經としてあります。それから地藏十輪經にも「もし小身の佛を念すれば、則ち小身の佛を見たてまつり、もし大身の佛を念すれば、則ち大身の佛を見たてまつる」とも説かれてあります。是等の文を以て、施物の多寡によつて、拜む佛に大小ができるといはれたもの、様にいふのは、どう見ても、はしひきかけた説、こせつけとみるより外はない。「はしひきかけ」とは、片端を引きかけること、少しの手がかりをこしらへて、それにかこつけることである。

九、「かつは檀婆羅密の行ともいひつべし、いかにたからものを佛前にもなげ、師匠にもほごすとも、信心かけなば、その詮なし、一紙半錢も佛法のかたにいれずとも、他力にこころをかけて、信心ふかくば、それこそ願の本意にてさふらはめ」この第三節は、前の誤解者、故意者と變つて、眞劍に施物にそれだけの力があるやうに思つてゐる者を誡められたものであり

自力念佛の相

今生の施物と來世の得脱

布施の眞意義

ます。即ち、たからものを佛前に供へたり、僧侶に供養したりすることは、布施の行であるから、その力でよいお證を開かせて頂くことができる様に考へるのであります。

一〇、「かつはまた檀婆羅密の行ともいひつべし」とは、前の誤解者と、故意者に對して、それともまた布施の行になるのだと思つて、それを勵ます考なのであらうか、といふ程の語氣であります、この語氣からみると、信者の方では、さうも思つてゐないのを、僧侶の方から、供養しなさい、あげなさい、さうすると、立派な布施の行になるぞよと、獎勵するやうに見えます。事實そんな風に云ひふらす者が、今日でもないではないが、かやうなことは大した間違であるから、その考を改めなければなりません。その間違の理由が次のお言葉であります。

一一、眞宗では迷悟の堺は、信心の有無によるのである、信心さへあれば、後生の一大事は立派に片付くのである、一紙半錢の施物をせずとも供養をなさずとも、お淨土まわりは間違ないのである。若し施しによつて參れるお淨土なら、貧乏人は行かれぬ譯である、もし布施して行かれる極樂なら、慈悲心缺けた我々は、行くことができなない筈である、爾るに如來の本願は善人も悪人も、富者も貧者も、更に機の如何を選び給はぬのである、これが本願の御正意である。

一二、自力の聖道門ですら、功利的の布施行は、眞の布施行ではありません、施す相手に、全心をなげこんで、初めて眞の施しができる譯であります、例ば佛に財物を供るにしても、そ

れで以て佛の歡心を買うやうな考では、眞の布施行ではない、佛は歡び給はうが、給はまいが、さうせねば濟まぬとして、捧げるところに、眞の布施行が成り立つのである、それであるから、富者の萬燈よりも、貧者の一燈と申すのではありませんか。それであるから、この所のお言葉は、眞宗に限らず、すべて佛敎に於ける布施行の眞精神を道破せられたことになりま

す。

一三、已上この第二段の三節は、彼の謂ゆる施物非事の起つて來る原因を究められたものでありまして、それが、單に誤解から來てをるか、將故意にいはれたのか、又は眞劍であるか。かやうに、原因をしらべてみられた揚句は、なるほどそれ等の原因もあるではあらうが、それは畢竟第二原因であつて、第一原因は、次にはいはれた如く、世間の欲心即ち生活問題が結びついてをるのであると、いはるゝのであります。

生活問題

一、「すべて佛法にことよせて、世間の欲心もあるゆへに、同朋をいひおごさるゝにや」施物非事の第一原因は、こゝちやと突きとめられたものである。これまでの所では、異解者に充分同情を持ち、かうであらう、あゝであらうと、種々に原因を推しはかられたのであるが、こゝに至つては、いよく彼等の假面を引きむいて、眞向から、痛棒を加へられたのであります。それでこゝまで來てはちめて筆者の腹底がわかるのであります、筆者は、これがいひたさに、

假面を撤した筆者

物慾の念

いろく筆を廻してをるが、畢竟、あれは前提であつて、この痛棒を加へたさであつたのであります。

二、併し、流石に今鈔の筆者も、まるきりむぎ出しには云ひかねたとみえて、「佛法にことよせて、世間の欲心もあるゆへに」と婉曲な筆方を用ひてあります、この筆方からみると、佛法の道理と、世間の欲心と、半分々々になつて、佛法の道理のあるところへ、世間の欲心も加はつて、あゝいふことを云ひだしたものであらうといふことになるのであります、前段の説明でわかつてをるやうに、施物非事は、どうしても佛法の道理上で成立しないことであるから、世間の欲心が先に立つて、あんなことを云ひ出したものであらうといふ結論になつて來るのであります。世間の欲心といふのは、物欲の念であります、これは宗教家に取つては絶対の禁物であつたのであります。禁物であると申しても、食はずには居られない、衣すには居られない住まずには居られないのであります、宗教家も人間である已上は、その點に於て毫も變らう筈がありませんが、たゞ心の置き所一つで、それが物欲の念となつたり、ならなかつたりするのであります。

三、それは、生活といふものを、或る重大な目的の手段方便とみる時は、衣食住はしながらそれに囚はれません、併し生活そのものを目的とする時は、衣た上にも衣たくなり、食ふた上にも食いたくなり、住んだ上にも住みたくなくなります。ごこくまでも生活に囚へられずに、生

生活を方便とするといふ考にならなくてはなりません、これが宗教家の生活であります。

四、生活を第一目的に置きますといふと他のものはすべて手段になつて来て、こゝにお叱りを蒙つてあるやうに、「佛法にことよせて」、佛法を賣り物にするやうなことになるのであります。その反對に、他の重大目的のための手段として生活を見る場合は、そこに自ら、乏しきに堪へるといふことになつて来るのであります。

五、重大目的といふのは何でありませうか、宗教上では、信仰の獲得がすなはちそれであり、我々が人間界に生を受けた第一目的は、如来を信じて、再び迷ふ氣遣のない準備をさせて頂くことにあるので、そこに目が醒なくては、此世に生れた所詮はないのであります。されば幸にして此目的を達することを得た信心獲得の行者は、自分の得た仕合の一端を、できうるだけ澤山の人々に頒ち與へて、共に人界受生の目的を達せさすことにつとめなければなりません、それがためには、矢張衣食住の必要もあることでありますけれども、どこ／＼までも、我々の目的は、自信教人信にあることを自覺して、すべてのものがその目的遂行の手段方便にすぎぬことを思はねばなりません。

六、ところが職業的の宗教家は、かゝる大目的を閉却して、宗教によつて衣食することを目的とするゆゑ、こゝにはいはれたやうな、恐るべき大邪見に陥るやうになるのであります。さればかゝる大邪見を拂ひ除けて、正しい考になるのには、職業としての宗教家をやめて了はねばなりません。ばなりません、これは實に現今の我々に取つては、由々敷大問題であつて、寧ろ云ふだけ野暮かも知れませんが、たい、こゝに云はれてあるやうな手厳しい御意見に接するにつけては、我々の考が動もすれば、間違だらけであつて、如何にも淺間しいといふところに氣をつけさせて頂くより外はありません。

七、世の中が變つて来て、特に生活問題の叫ぶる、時代、我々も亦た相當之れについて考へさせられるのであります、幾ら考へても、もど／＼宗教を生活の手段とするといふことが、すでに大きな間違である已上、到底問題の片が付さうにも思はれません、宗教は斷じて生活の方便ではありませんから、生活問題が矢釜しければ矢釜しきほど、又自分が生活問題に悩まれば悩まれるほど、我々としては、果して自分の第一目的のために努力してをるか否かを深く考へて、彌増に自己の天職のために戦はねばなりません、道心の下に衣食ありといふは、古臭い言葉なれども、永遠に眞理が含まれてをることを思はぬ譯には行きません。

第二十二講 總結の文

大要

一、「右條々」已下總結の文は、凡そ五段になつてゐます。先づ初めに、信心一異の問答のこ

ではないことを誠めらるゝ意味であります。次は聖教を友とせよといふ一段で、前にいはれた様な正しい信仰は、聖教を友として養ひえらるゝものである、若し聖教を友とせず、自分勝手な解釋をすると、上に數々あげてある様な、異解を生ずるといふ意であります。第三段は親鸞一人がためのお慈悲であるといふ先師の述懐を引き合にし、我等の罪惡の深きことを知りて本願のお救をよろこぶべしといはれ。第四段では、たゞ如來のみ眞實にましますと知り、すべてよしあしの沙汰を離れよとすゝめられ。最後に於て今鈔一部の製作理由を明されたのであります。

二、結語としては寧ろ長すぎるほど、内容が豊富である、他の章の例に倣へば、五段を五章に分られてもよい位であります。而も五段を通じて一貫したる意味を云へば、すべてが今鈔製作の理由になります。即ち、第一段は、異解を改めて一味の信仰に任せしむるが今鈔の主眼であることを示し、第二段は、この歎異鈔を指針として、眞實の信仰を養ふべしとし、第三段第四段は、法に對し機に對して自覺を喚起せよといはれ、最後に總括して今鈔の製由を明されたものであります。各段別々の意味が含まれてをりながら、大體に於て、今鈔の製由を明すの主義であります。

三、今私は、その各段の文句を辿つて、之を講解することをやめ、その意味を中心として話述したる某所に於ける講話「絶對他力の大道」なる一篇を以て、之に代へやうと思ひます。

(難解の字句は別に末段に於て略解す、第四七四頁已下を参照せよ)

一貫する
意義

絶對他力の大道 (歎異鈔の總結の文を中心として)

我等は感謝せざるべからず

一、私は、此の話をする前に、私の常に、忘れ難い、言葉があります。其れは「安心決定鈔」末初に、

あさなく報佛の功德をもちながらおき、ゆふなく彌陀の佛智とともにふす、うとからん佛の功德は、機にこそければいかげせん。眞如法性の理はちかけれども、さとりなき機にはちから及ばず。わがちからも、さとりもいらぬ、他力願行を、ひさしく身にたもちながらよしなき自力の執心にほだされて、むなしく流轉の故郷にかへらんこと、かへすがへすもかなしかるべきことなり。

と言ふ、お言葉であります。之れは私が、十二三年前、信仰問題に就いて、非常に煩悶した時に、色々、先輩や、同人の話を聞いたり、種々の御聖教や、書物を讀んだりしたが、何うしても、自分に、信仰が得られない。處が、ふと、此の御言葉に、ぶつかつて、恰も、電氣にでも觸れた様に、言ひ知れぬ、偉大な感じが致しました。

二、茲に、一寸申し上げました通り、私は、如來の、絶對他力のお慈悲は、電氣の様なものだと思ひます。電氣と申すものは、宇宙間、何處にでも、在るものであります。必ずしも

安心決定
鈔の語

聖教は電線の如し

電燈會社の占有物ではありません。併し、發電の仕掛がなければ、之れを、呼び起すことが、出来ません。よし、いくら、之れを、呼び起しても、電線がなければ、傳導して、車を廻したり、火をともしたりすることが、出来ません。如來のお慈悲が、又、さうであつて、十方法界に充ち満ちてあります。所謂、盡十方無碍光如來であります。其の慈悲を、人格の上に表現した方が、阿彌陀佛であります。そして、其れを、釋尊を初めとし、親鸞聖人等の様な、善知識の電線に依つて、吾々に、傳へて下されるのであります。それで、私が、ふと、此のお言葉に、觸れて、言ひ知れぬ、偉大な感じを起したのは、丁度、感電した様なもので、あつたらうと、今も思つて居ります。そこで今教異鈔の結文の第二段に、

いづれもく、くりごとにてさふらへども、かきつけさふらうなり。露命わづかに枯草の身にかゝりてさふらうほごにこそ、あひともなはしめたまふひとく、御不審をもうけたまはり聖人のおほせのさふらひしおもむきをもまふしきかせまいらせさふらへども、閉眼ののちはさこそしどけなきことやもにてさふらはんづらめとなげき存じさふらひて、かくのごとくの義ども、おはせられあひさふらうひとくにも、いひまよはされなんごせらるゝことさふらはんときは、故聖人の御こゝろにあひかなひて、御もちひさふらう御聖教どもを、よくよく御覽さふらうべし。おほよそ聖教にも眞實權假どもにあひまじはりさふらうなり、權をすて實をとり、假をさしおきて眞をもちゐるこそ聖人の御本意にてはさふらへ、かまへてく

聖教をみみだらせたまうまじくさふらう、大切の證文ども小々ぬきいでまゐらせさふらひて、目やすにしてこの書にそへまゐらせてさふらうなり。

一段の意は、自分の存命中は、自ら不審もき、相談相手にもなるであらうが、死したる後には、どうぞ故聖人の御言葉や色々の聖教を指針とせよとすゝめられたのであります。又、聖教に眞實權假があるといはれたのは、前の電氣の例で云は、裸のまゝの電線は眞實、側を包んで感電の危険がないやうにした分は權假である。

三、さて、あさなく、ゆふなくとは、時間的に、申されたもので、之れを、空間的に、申したならば、何處に居る時でも、如何なる状態にあつても、と言ふことになります。其れ故に『御臨末の御書』には、

一人居て喜ば、二人と思ふべし。二人居て喜ば、三人と思ふべし。その一人は親鸞なり。之れが、宗教的生活と云ふものであります。或る座談會の席で、或る學生が申されました。「あなたは、佛と言ふものに對して、何う考へて居らるか。佛の定義と言ふものがありますれば、承はり度い」と、そこで、私は「別にむづかしいことは、言ふことが出来ませんが如來は、吾々と俱にあり、吾々と俱にある方が、如來であります。之れが、私の佛に對する定義であります。」と答へたことがあります。『大經』には、

若し、三途勤苦の處に在りても、此の光明を見奉れば、皆、休息することを得て、復、苦

我れ如來と俱に在り

惱なし云々

と仰せられて、如何なる處にあつても、自分が、佛と一緒にあるのだ、と言ふ考へが、徹底して居れば、其處に、言ふに言はれぬ慰安を得ることが出来ます。三途勤苦とあるから、必ずしも、此の人間界だけではありません。之れ即ち、十方法界に、佛の慈悲が、充ち満ち給ふて在るからであります。

四、私は、於茲、第二十講にも引例してをいた彼の鈴辨殺して、有名な、山田憲の言つた言葉に、深い味ひがある様に思ひます。彼が、彼れと懇意な、鷹鳥菽子女史に、送つた手紙が朝日新聞に、載つて居たのを、見ますと、其の一節に、

幸ひに、教誨師藤井様より、有難き御法に、氣づかせて頂き、自力の本尊は、茲に、釋然として、他力に、歸依し、別種の生活に入り候。

と申して居りますが、之れに就いて、私は、或る人から、憲の入信の徑路を、聞きましたから、其の儘を、お話すれば、彼は、非常なる秀才でありまして、其の上、運が好くて、大學卒業後も、とんとん拍子に、成功致しました。そこで、何もかも、此の世の中のこと、自分の思ふ通りになるものだ、と思ひ込むので、それが、此の手紙の、「自力の本尊」とある所でありませぬ。然るに、彼の、その自我は、遂に、彼をして、恐るべき、大罪を、犯さしむるやうになつた。彼が、鈴辨を殺害するときも、決して、之が、曝露するやうなことがない、と信じ切

山田憲の入信まで

謂ゆる別種の生活

つてやつたと、言ふことであります。けれども、遂に、彼の確信は、裏切られて終ひまして、獄裏に、呻吟する身とはなりました。併し、彼は、自ら、大罪を、犯したとは、思はない。國家にかわつて、奸商を、誅したのだ、と自分勝手な、理窟を付けて、何うしても、罪の深い奴だとは、思ひませんでした。それ故に、佛敎の信仰に、這入らう道理がありません。處が、彼が、第一回の公判の時、あつたさうであります。彼は、公判庭に、引き出され、傍聴人の、群り集つて居る有様を、一眼見るや、私のなしたことが、基となつて、これだけの、多くの人を、騒がしたのだ、と言ふことは、誠に、相濟まぬことである、之までは、未決に入つて居て、外部の人が、何れ程騒いで居るか、解らなかつたが、今、慙うして、澤山の傍聴人を見ると、如何にも、自分の爲したことが、世間を騒がしたのである。人に迷惑をかけた、悪いことを爲したと、非常に深く感じて、其れから已後は、自分の罪惡に眼が付き、此の罪惡の身が、早晚、斷頭臺上の、露と消えねばならぬ、運命を有つて居る。然らば、其の行く先きは、何うであらうか。兼て、教誨師から聞いて居た、如來の慈悲は、此の私を、お助け下さるのである。と、茲に、「釋然として、他力に歸する」ことが出来たのであります。それ已後は、所謂、「別種の生活」に入つて居る。即ち、感謝の日暮をして居ると、言ふことであります。監獄は、此の世の、地獄であります。そこに、差し込むだけ、他力の、お慈悲に依つて、彼は、監獄の儘で、別種の生活を、なしつつあります。それから見れば、監獄も亦、他力の大道の上の生活と

言ふことになるのであります。彼が犯した所の大罪は、もとより、憎むべきことではあります。が、それが、因縁となつて、彼が、果して、生死問題に、徹底したとすれば、實に、得難い幸ひを、得た譯であつて申さねばなりません。

五、四五年已前、九州の別府で、麻生さんと言ふ、有難い、お醫者さんに會つて、色々、信仰上の話を、交換したことがあります。其の時、同氏は、此れは、私が、病中に、口ずさんだつまらぬものであると言つて、小さい本に、印刷した、澤山の、歌や、俳句を示されました。其の中で、特に、有難いと思つたものを、十首計り、寫して、持つて歸りました。其れは『生ける信仰』の附録に載せてありますが、今、前からの話に、關連して、思ひ出したのであります。麻生さんの、詠まれた歌に、「彌陀たのむ身となりてこそ暫くの浮世の中も住みよかりけり」と、之は、同氏が、自分の境遇を、其の儘、喜んで詠まれたもので、あらうと思ひます。之れ即ち、山田憲の所謂、別種の生活、普通の人間では、味ふことの出来ない、特別な、喜びであります。親鸞聖人の、北國流罪に就て、「之れ亦師教の恩致なり」と喜ばせられたのと、彷彿たるものがあります。

名號の父と光明の母

一、さて、信仰生活は、別種の生活であります。何う言ふ所が、別種であるかと申しますと自分が如來の、御加護をうけて居る、如來の、お慈悲の中に生きて居る、と云ふことが、領解

如來の心に生きる生活

出來たのが、其れであります。然るに、其の御加護とは、前述の『安心決定鈔』のお言葉にある様に、無始已來佛に、守られて居る、即ち如來の御心の中に生きてをるので、昨日や、今日に始まつたことではなく、昨年や、今年に起つたことでもありません。けれども、其れを、自分に、體驗することが、出來なかつたために、別種の生活に、入ることが、出來なかつたのであります。蓮如上人の『御一代聞書』に、よく解り易い喩を以て、

重寶の珍物を調へ、經營をして、もてなせども、食せざれば、その詮なし。同行寄合讃嘆すれども、信をさる人なければ、珍物を食せざると同事なりと云々 (二二三)

と申されてあります。大悲の、御加護をうけて乍ら、其れを、自分のこと、思はずして、今日まで、迷ひ來たその有様は、御馳走に向つて居り乍ら、食べない人間と、同じい様な者である、喩へられました。其れ故に、私共は、何はさておき、先づ食べねばなりません。食ふと言ふ事は、事實であります。人に食べて貰つても、腹はふくれません。自分が食べねばなりません。其れ故に、信仰は、事實であつて、概念ではありません。

二、さて、其の信仰を、何うして、吾々が、發起するのであるかと申すに、之れ亦、如來のお育てで、あらねばなりません。其れ故に、善導大師は、『禮讚』に、

光明名號を以て、十方を攝化し、唯信心をして、求念せしむる。

と言はれ、親鸞聖人は、此のお言葉を擴充して、所謂、光號因縁の釋を、試みられました。其

の御釋は、『行卷』に出で居ります。その文を申しますと、
 良に知んぬ、徳號の慈父在しませば、能生の因缺けなん。光明の悲母在しませば、所生の縁乖きなん。能所の因縁和合すと雖も、信心の業識に非ずば、光明土に到ることなし。眞實心の業識、之れ即ち内因とす。光明、名號の父母、之れ即ち外縁とす。内外の因縁和合して、報土の眞身を得證す。

此のお言葉を、解りやすく、表に示すと、左の如くなります。

名號(父)——因 和合——信心(子)を生ずる

光明(母)——縁 和合——往生(果)を生ずる

信心——因 和合——往生(果)を生ずる

名號光明——縁 和合——往生(果)を生ずる

私は此のお譬喩が、絶對他力の信仰を、人生に比較してある所に、特に、有難い思召が、有るやうに、考へます。親鸞聖人の信仰は、いつも現實の上に、如來の救済を、味ふのでありまして、所謂、人間の宗教であります。今此のお譬喩に就て、少し深入つて味つて見ませう。

三、先づ、名號と、光明との父母が、信心の子を生む、即ち吾人の信仰は、如來の光明名號に依つて、生み出されるのでありますが、此の親と、子との關係に就て、しばらく、三種に分けて味ふことが出来ます。

(第一) 親が子を生むといふことは、種の持續を、意味するのであります。人間が、世の中に對する天業として、何が大事だと言つても、子孫を造るほど、大事なものはありません。其れで、昔から妻を娶つて、子なきは、去ると言ふやうなことも申します。もとは、人間よりも畜生や、草木が、此の世界で、幅をきかせて居つた、と云ふことは、考古學上、疑ふことが、出来ませぬ。近い所で云うて見ても、吾々の少年時代には、随分、田舎等へ参りますと、狼とか、猪とか言ふ荒い獸が、澤山に居つて、人間を困らせる。私の身内のものに、猪の穿に落ち込んで、見張り番の獵師から、狸坊主と間違ひられて、ひどい目に會つたものがあります。今日では、そんなものは、何處へ往つたか、殆ど居りません。是等の例を以つて見ましても、段々人間が澤山になつて、彼等畜生を、征服して、人間の世界を、廣めて行くと言ふことが、解ります。人間が、斯様に、幅をきかす様になつて、追々、世が文明に進みますが其の本は、所謂、種の持續であります。如來が、父となり、母となつて、私共に、信仰の子を生みつけて頂くのは、畢竟、如來の子を、造らへて、此の世界を、だんく、よりよくして頂く譯でありまして、佛の、世界改造運動と、見ねばなりません。憊う言ふ風に、私は味ひます。

四、(其二) 人類の、十五萬年の、進化の歴史を、吾々が、親の胎に、宿つてから出るまでの、僅か一年足らずの間に、繰り返す、と稱せられてある。原人は、或は猿に似て居つたとも

稱しますが、何れにせよ、畜生と大差がなかつたものでありませう。四足で匍うて、尻尾が有つて、到底、今日の人間とは、較べものにならない。其れが、何時の間にか、進化して、吾々の様な、姿になつた。其れ等を十五萬年とすれば、吾々が、母の胎内に宿つて、母の胎から出るまでの間に、其の長い歴史を、くりかへす譯であります。今、之を、如來と、吾々の間に就て申せば、吾々の信心は、如來から起る。此の信即ち南無阿彌陀佛、其の南無阿彌陀佛を成就するために、如來の五兆の願行が有つた。其れを吾々に廻向し給ふことは、一年に非ず、半年に非ず、實に、開信の一刹那であります。恰も、人類發達の歴史を、僅か十ヶ月に於て、くりかへすが様な、状態であります。「安心決定鈔」に曰く、

まことに往生せんとおもはひ、衆生こそ願をも起し、行をもはげむべきに、願行は菩薩のところにてはげみて、感果はわれらがところに成す。

五、(其三) 大體に於て、子は、親に似るものであります。親に似ない子を、不肖の子と申しまして、悪いことのように、云ひ慣らはして居ます。丁度、その様に、吾々の信仰も、機法一體でありまして、如來の方で成就せられた、お慈悲の儘を、吾々が領受いたします。天上の月と、水中の月の様だとも喩へます。親鸞聖人は、信心に就て、本末を分けて、如來の三信が、其の儘、衆生の信心となる、と云はれてあります。従つて、總ての正しい信仰は、皆、平等であつて、吾々の信心も、如來より賜り、他の信心も、如來より賜るのであります。本が一つで

一念の信

本末同一の信

あるから、末も亦一つであります。そこで『御傳鈔』には、信心一異の論の所に、親鸞聖人は、上人の信心も他力より賜らせ給ふ、善信が信心も他力なり。故に、等しくして、かはることなし。

と言はれ、其の次に、法然上人のお言葉として、
源空が信心も、善信房の信心も更にかはるべからず。唯一つ也。
と言はれ、此の『歎異鈔』の結文の第一段の所にも、亦同じやうな意味の、お言葉があります。曰く、

「故聖人の御ものがたりに、法然聖人の御とき、御弟子そのかすおはしけるなかに、おなじ御信心のひとも、すくなくおはしけるにこそ。親鸞、御同朋の御なかにして、御相論のことさふらふ。そのゆへは、善信が信心も、聖人の御信心も、ひとつなりと、おほせのさふらひければ、勢觀房念佛房なんごまふす御同朋達、もてのほかにあらそひたまひて、いかでか聖人の御信心に、善信房の信心、ひとつにはなるべきぞとさふらひければ、聖人の御智慧才覺ひろくおはしますに、ひとつならんとまふさばこそ、ひがごとならめ、往生の信心において、またくことなることなし、たゞひとつなりと御返答ありけれども、なほいかでかその義あらんといふ疑難ありければ、詮するところ聖人の御まへにて自他の是非をさだむべきにてこの子細を申しあげければ。法然聖人のおほせには、源空が信心も如來よりたまはりたる信

心なり、善信房の信心も如來よりたまはられたまひたる信心なり、さればひとつなり、別の信心にておはしまさんひとは、源空がまいらんずる淨土へは、よままひらせたまひさふらはじと、おほせのさふらひしかば、當時の一向專修のひとりのなかに、親鸞の御信心に、ひとつならぬ御こともさふらうらんとおほへさふらう。」

六、已上の様な、二三の點から、我々の信仰の子が、如來の名號、光明の父母に依つて、生み出さるゝことを、深く味はして、貫ふことが出来ます。次に、親が子を育て上げるのを、例に採つて、信心の子が、光明名號の父母に依つて、育て上げられ、遂に、往生の果を生ずると云はれて、あるに就て、又、私は、次の様に、味はして、貫つて居ります。

(其一) 人間と、畜生との相違は、教育を受けるのと、受けないのとの、相違と見ることが出来ます。畜生の中でも、猿や、鸚鵡や、象等は、教育を施せば、或る程度まで、人間のまねをしますが、彼等自身に於いては、何等、教育的の施設をして居ないから、昔の彼等と、今日の彼等との間に、殆んど、進歩も、發達も、認めることが、出来ません。唯、人間ののみ、非常な進歩を、遂げたのは、偏に、之れ、教育のお蔭であります。教育は、家庭教育と、社會教育との二つに分れますが、就中、前者を大切とします。家庭に於いて、母より受くるものは、感情の教育で、あります。父より受くる所は、智的、意志的の教育で、あります。之を、今、お慈悲の上に味へば、光明の母に依つて、我々は、觸光柔軟の感情教育を、施されます。蓮如上

他力より
成する往
生

母より情
父より智

人が、言はれた様に、信を得れば、お互の間に、荒くものも云はれぬ、ことになります。人間の殺伐なる氣性を軟らげる。之れが、我々の感情教育で、あります。次に、名號の父から、受くる所は、吾人の智的、若くは、意志的の感化でありまして、信仰を得れば、唯、普通の學問を、したもので已上に、自然に、ものゝ道理を辨へ、卑屈な思ひが、なくなつて、いそ／＼した心地になりますから、「稱名は、勇みの念佛なり、信の上は、嬉しく、勇みて、申す念佛なり」と云はれてあります。

七、(其二) 親が、子を教育するには、如何にするか。之に就ては、昔と今日とは、自ら異つて居ります。今日の方法では、注入主義の教育は、駄目です。啓發主義で、なくてはなりません。我々の、先天的に備へた所の性能を、引き出して呉れる様な、方法を以て、教育せねばならない、と考へられて、居ります。信仰が、亦、さうでありまして、動もすれば、何か心の中に、固まつたものを、投げ込んで貰ふ様に、考へてはなりません。斯様に考へることからして、此方に、貫はれたとか、貫はれぬとか、握つた様になりたい、と云ふ様な心が起ります。それは、全く、不可なので、あります。無始已來、我々の迷うて居る時から、心の底に沁み込んで、下されてあります。如來の御心を、宿善開發と、開かせて頂くのが、光明名號の御作用で、何處までも、啓發主義であります。「凡夫の心を、其の儘置きて、よき御心を、加へ候て、よく召され候」罪が、功德にかはり、障りが、功德に變る。之れ光明名號の御育て、

宿善開發

あります。

八、(其三) 教育の最後の目的は、人格の完成で、なければなりません。他の目的の爲めに施した、教育ならば、決して、子供に、眞の幸福を與へることが出来ません。丁度、其の様に光明名號の、父母の教育の目的は、唯だ一時、我々の煩悶を除くとか、慰安を與へるとか、人間らしい行ひをせしむるとか、云ふだけに、止るのではなくして、吾人をして、佛と、同じ佛にすることにあります。所謂、報士の、眞身を得證せしむるにありするのであります。之を、要するに、子が、親を教育することく、吾人が、光明名號のお育てに依つて、究極の目的たる成佛の理想を、達するので、ありまして、信を頂くまでと、信を頂いてからと、言ひ換へれば、吾人の過去の過去際から、只今まで、只今から、未來の未來際まで、暫くも、他力の大道の上に置かれないことが、ないのであります。

求めらるゝ身

一、已上述べました所で、我々は、何とも思はず、居るけれども、不知不識、他力の大道を、歩まして、頂いて、居るのであります。之に就て、私は、何時でも、思ふのであります。が、丁度、我々が、此の地球の上に、居るやうなものであらう、と思ひます。地球の上には、人間も、居れば、畜生も、居ります。家も、あれば、草木も、あります。此れ程、堅い、此れ程、確かな所がない、と、思つて居りますから、家を建てるには、十臺石を突き込んで、其の

上に、鐵筋コンクリートの普請をして置けば、容易なことでは、動く氣遣ひがないと、安心して居ます。だが、其の家は、其の儘、動いて居るのであります。地球自身が、日に一回宛回轉し、又、一年に一回宛、太陽の周圍を、巡りますから、人間や、畜生の載つた儘、家や、藏の建つたまゝ、動かされつゝ、あるのであります。幾ら、動くまいと氣張つたとても、氣張つた儘、引きずられて居ります。私共が、學校に居る時、體操の時間に、氣をつけた姿勢を、させられましたが、考へて見れば、可笑しい様なもので、氣をつけた儘、矢張り、動かされて居ります。それ故、此の世界には、絶対に動かないものはありません。動かない様な風をした儘で、動かされて居ります。靜の儘が、動であります。動中の靜であります。靜と云ふのも、矢張り、地球の中心が、引ツ張つて、居りますから、ちツとして居ることが出来るので、動く奴のお蔭で、動かぬ様な状態に、有ることが出来ます。

之を以て、解る如く、我々が、自力の修行をするとか、自分で悟りを開くとか、考へて居る聖道門の人間までが、實は、他力中の自力であります。他力と云ふことを、知りませんから、何だか自分の力で、やつて居る様に考へます。けれども、他力の上に、載つて居り乍ら、其れをやつて居るので、絶対に、自力と云ふものは、有りません。其れで、親鸞聖人は、總てが如来の方便だ、と味つて、喜び給ふたのであります。

二、今、我々の眼の前に現はれた、此の世の問題に就て、少々お話致しませう。近頃、物價

問題が、大變やかましくなつて來ました。これには、種々の原因がありませうが、何うしても根本になるものは、需要、供給の關係であります。需める方が、供給するよりも、非常に多いか、非常に少いか、其の關係で、物價は、高下致します。併し、今日の様な状態では、何處まで騰るか、解りません。或る新聞記者が、東京の三越へ、視察に行つた時、田舎から出たらしい、身なりの粗末な老女が五六百圓位の帯を、購つたのを、非常に驚いて見て居ると、其の側の方に、五十圓の商品券を、二十枚も下さい等と云ふ、田舎者もあつた、と申して居ります。斯う云ふ調子で、ありますから、需要の方は、先づ以て、無限と、云はねばなりません。そこへ、供給者は何うかと申しますと、一向に働いて呉れる人間がありません。生産の能力が、需要の高に、比例しないと云ふ様な譯柄で、今日の物價騰貴の現象を、生み出したらしい。夫れならば、もつと、お金の高を、減らして、物の値段を、下げる様なことが、出來さうなものであるのに、そんなことを、人工的にやつたら、反動的に、暴動が起らないにも限らない、と觀察する者もあります。兎も角、物價の高下は、さう小刀細工で、行くものではない、と觀處かに、人間の方で、抵抗することの出來ない、時勢の力といふやうなものが、加はつて居る様に、考へられます。換言すれば、一種の他力であります。先日、攝津の灘で、酒屋の主人から、聞きました、灘の酒は、日本一と稱して、非常に、上戸黨から、賞玩がられます。ですから、これには、何う云ふ祕傳が、あるかと、種々、研究に來る人が、ありますけれども、

人力已上

何うしても、解りません。同じ米で、同じ方法で、他の場所でも造りましても、灘の様な酒は得られません。そこで、これは、土地の天然の感化力に依るものであると云ふやうな結論に達したと云ふ話であります。僅か酒一つを造るにしても、人力だけでは、出來ないものだ、と云ふことが解ります。

三、近頃非常に、思想問題が、やかましく、我々日本人の頭の中は、丁度、泥のたまつた池の中を、棒で、グル／＼混ぜる様な塩梅で、誠に、混亂して居ますが、此等も、畢竟、世界の大勢とでも申しませうか、何處で、誰れが、起したと云ふ様な、簡單明瞭なものでも、ありません。それ故に、法律等の權力を以て、之れを壓迫した所が、何の益にも立たないと、思ひます。現在、眼前の事柄の上でも、さうであるのに、我々の迷悟の大問題は、自分の纖弱い力で、左右の出來様筈が、ありません。

四、さて、それでは、如何にして、自力を捨て、他方に歸するのでありませうか。之に就て、大抵の人は、自分から求めて、行かねば、解らない様に、思ひますが、成程求めるやうで結構ではあるが、果して、求め終せるものであるか、と云ふことを、考へて見ねばなりません。寧ろ、我々の力を以て、求むれば求むる程、解らない様に、なりはせぬか。夏の頃、高い山に登るものが、澤山ありますが、彼等が、往々、山の中で、行き倒れの、哀れな有様に、なることがあります。夫等は、思ひ掛けない、暴風雨に出くわし、濃霧に包まれ、方向を失ひ、活路

求めんか
求められんか

を求めて、奥へ奥へと、入り込んで、遂に、根氣に疲れて、倒れてしまふ。之に依つて考へても、若し斯の如き場合に、遭遇したならば、自分で活路を求めて進むよりも、人に尋ねられる身になつた方が、助かる道では、ないでせうか。換言すれば、現在の地位に止つて、木の下か岩の間に隠れて居れば、尋ね人が、決つとやつて来るに、違ひありません。自分が、尋ねることを止めて、尋ねらるゝことを、必要とするでは、ありませんか。信仰問題に、於ても、又、さうであります。求めて行く間は、駄目でありませぬ。定水をこらすと雖も、識浪しきりに動き心月を觀すと雖も、妄雲なほ蔽ふ。行けば、行く程、解らなくなつて、氣が、遠くなり、所詮駄目だと云ふ心になります。そこで、求めるのではなく、求めらるゝ自分、求めて下さるゝ方があると、氣付かせて頂くのが、信の第一歩であります。

五、さて、求めらるゝ自分は、何うかと云ふに、世間では、總て條件が附いて居る。近頃新聞に、人を求める廣告が多い、或は店員を求め、事務員を求め、嫁を求め、婿を求むる等の廣告を見て見ると、凡て、善い事を並べ立て、此れ／＼の學校を卒業したとか、此れ／＼の經歷があるとか、保證人は何うとか、品行は何うとか、容色は如何、財産は如何、誠に、善いこと揃へであります。これは、止むを得ずなすので、さう云ふ人を、求める求め主の手前から云へば、自分の店なり、家なり、仕事なりの手傳をして貰ひたい、片腕になつて貰ひたいと云ふのが、目的でありますから、條件を附けなければならぬ譯であります。併し乍ら、若し、茲

求めらるゝ
我れは

に、眞實の慈善家があつて、救助の意味に於て、人を求めるときには、更に、其の人に期待する所はありません。先方より手傳をして貰ふと云ふのではなく、自分が其のものゝ、世話をすることを、目的としますから、前の、人を求むる廣告とは反對に、なるべく困つて居る、なるべく氣の毒な、貧乏人を選ぶと云ふことに、なるのであります。今、信仰上に於て、已に、我々が、求めらるゝ、側に立ちますと云ふと、如來は、我々に、手傳を要求し給ふのではなく、救済のために、我々を、求め給ふのであります。されば、自分の機の善惡を考へることは、全く、必要がありません。若し、考へるならば、「男女、善惡の凡夫を、働かさぬ本形に、生るべからざるものを、生せさせればこそ、超世の悲願とも、横超の直道とも、申す」のであると云はれ、此の私が、正に其の求めらるゝ相手であることを、思はせて貰はねばなりません。

「歎異鈔」(即ち今の總結の第二段)に、
「聖人のつねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちたる本願のかたじけなさよと、御述懐さふらひしことを、いままた案するに、善導の、自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしづみ、つねに流轉して、出離の縁あることなき身としれといふ金言に、すこしもたがはせおはしませぬ。さればかたじけなくも、わが身にひきかけて、われらが身の罪惡のふかきことをもしらず、如來の御恩のたか

きことをもしらすしてまよへるを、おもひしらせんがためにてさふらひけり」
と言はれた思召しに、深き〜味ひがあります。

仰げは彌よ高し

一、求めてをるうちに、求められてをることがわかりますから、先づ求めねばなりません。然るに、道を求むるには、それ〜順序があります。順序を誤ると、同じことでも、手間がかかります。一足飛びに、眞實の信仰に、入るものもありませんが、それは、甚だ稀れでありまして、大體に於て、順序を追うて、信仰に入ります。其の順序を経て行く必要があると云ふことに就て、私は斯う云ふ話を聞いたことがあります。婦人方が、着物を縫ふに用ひる針を、職工がこしらへるのに、一人して、一日に、十本より仕上げる事が出来ません。それ故、十人かゝれば、百本であります。然るに、其の十人が、手を揃へて、針金を切るものは切る一方、磨くものは磨く一方と云ふやうに、各分業的に仕事をすると、驚くべき澤山の数を、仕上ることが出来ます。即ち一日に、四萬八千本を、造ることが出来る云ふことであります。これは、一例だけれども、道にも、又、順序を要することは、申すまでもありません。蓮如上人が、之に就て、四段の順序が要ると、仰せられてあります。「御一代記聞書」に、
蓮如上人、幼少なるものには、まづ物を讀めと仰せられ候。又その後は、いかによむとも復せずば、詮あるべからざる由、仰られ候。ちと物にこゝろもつき候へば、いかに物をよ

み、聲をよくよみしりたるども、義理をわきまへてこそと仰られ候。其の後は、いかに文釋をおぼえたりとも、信がなれば、いたづらごとよと、仰られ候。(二二五)

これは、讀書、復習、理解、入信の順序によつて、道を求めよと、申されたものであります。二、讀むと云ふことも、唯、口で讀んだだけでは、益に立ちません。心に、之れを讀むことではありません。又讀むことの出来ないものは、聞くのであります。聞く云ふも、耳で聞くだけではなく、心で聞かねばなりません。御一代記聞書に、

前々住上人、仰られ候。聽聞心に入れて申さんと思ふ人はあり、信をたらんと思ふ人はなし。されば極樂は、たのしむと聞いて、參らんと願ひのぞむ人は、佛にならず、彌陀をたのむ人は、佛になると仰られ候。(二二三)

と、云はれてあります。復習に就きましたは、
聖教を拜申すも、うか〜とおがみ申すは、その詮なし。蓮如上人は、たゞ聖教をば、くれ〜と仰られ候。(九〇)

と、幾度も幾度も、丁寧にくりかへして、其の意のある所を、受取らねばならぬ。書物ならば復習であります。聽聞するならば、談合であります。自分の聞いたことに就て、疑問を立て、見たり、人からも、色々尋ねられたりして、味ひが出て來るのであります。これは、信仰上だけではなく、世間の交際等でも、必要だと思ひます。人と人との交際に於て、さう初めから

直ぐに、心やすくなられるものではありません。幾度も會つて話すうちに、人の氣前も解り、信用するに足る人物と云ふことが解ります。一寸話は違ひますが、私の知つて居る、或る布道家に、三度吃驚と綽名されて居る人があります。其の人は、名前を聞けば、誰れでも驚くやうな、奇抜な名を有つて居ります。之れで一度、處が、其の人を招聘して、やつて来た人物を見ると、如何にも貧素で、此の人が、誰れそれと云ふ、有名な人であるかと、二度吃驚、今度演壇に立つて、話をするのを聞くと、それは又、非常に甘いもので、そこで三度吃驚と、稱せられて居ります。私なども、矢張り、三度吃驚の部類で、大分以前から、色んな、つまらぬ物を、書いたりした爲めに、人々は、偉い者の様に、思つて居られますが、偶々、お話し等に招かれて行きますと「貴殿の様な、スカンピンであつたか」と云はぬばかりの、挨拶を聞くことがあります。そして、演壇に立つて、お話をすれば、非常に、口無調法なものだから、愈以て吃驚仰天と云ふ有様であります。總て斯様なもので、人の看板や、玄關口だけでは、眞價は解りませんが、よくそれと交際して、話を聞いたり、意見を戦はしたり、さうするうちに、眞價が解つて、來るのであります。御法義の有難味も、矢張り、同じことで、一寸聞いた位のことでは、其の味ひは、解りません。然るに、世の中の方は、表面だけ聞いて、それで、宗教の評價を、しようとするやうな傾向が、ありますから、それは、識者の取らない所であります。

三、私の郷里に、相當資産のある、分別のある、村では、信用のある人が居ります。其の

人が、何時でも、私の寺へ參る同行を、捉へて、お前達は、お寺に、お説教さへあれば、かゝさず參るが、何が有難いのか、一遍聞けば、それで解つて居るではないか。それよりも、我家に居つて、仕事等をした方が、勘定もい、等と言つて、半ば嘲笑的に、申すさうであります。が、それを聞いた同行は、御法義の味ひを知らぬものは、仕方がないと言つて、氣の毒がつて居ます。總て、此の信仰上の問題は、深く入れば、入るほど、味ひが出て參りますから「かみしめて見れば味ある明石鯛」の様なものであります。私の或る友人が、斯う云ふことを申しました。自分は、貧乏であるからでもありますが、高い錢を出して、珠數を買ふたことがない。何時でも、十錢か、十五錢の安物を買つて、さうして、それを、絶えず磨くと、だん／＼光が出て來る。二三年もつて居る中に、高いお金を出して買った珠數よりも、よほど光りのある様になる。そしたら、それを子供に遣る。そして又、新しい安物を求めて、其の艶／＼出すのが、何んとも云へない、心地がする。人間も、丁度こんな風に、修養を積んで行つて、光がある、價値がある」と申しましたが、これは、甚だ味ひのあるはなしだと思ひます。それで、其の味ひの出る所まで、行かねばなりません。大抵のものが、未だ、味ひの出ないうちに、愛想を盡かして、投げ遣りにして、しまふのであります。御一代記聞書に、

きればいよ／＼かたく、仰げばいよ／＼たかしといふことあり、物をきりてみてかたきと知るなり。本願を信じて、殊勝なるほども知るなり。信心おこりぬれば、たふとくありがたく

よろこびも増長するなり。(二五二)
と申されてありますが、信仰の妙味は、誠に斯う云ふ所にあると云ふことを、思はねばなりません。

四、私は、斯う云ふ話を、するに就て、曾て、友人から聞いた懺悔話を、思ひ出さずに、居られません。其の人の申さるゝのに「自分は、曾て、せめて百圓の金が貯つたならばと思つて、頻りに、儉約をして見るけれども、仲々百圓にはならない。六七十圓になつたかと思ふと臨時に必要があつて、それを費ふ、さうして居るうちに、到頭百圓を越して来たが、それから以後、自分の金に對する考へが、これまでとは、まるで變つて、来たのである。何んなに、變つたかと云ふに、これまででは、義理ある借金は、成る可く返す様にして、餘つたならば、預けるやうにしたのであるが、百圓を越してからは、百圓を傷けまいと思ふものであるから、人に、支拂ふべき、義理ある金でも、支拂はず、成る可く預ける様に、預ける様にして、金の高の増えるのを、非常に面白く、嬉しく思ふ様になつた。人間は、誠に淺ましいものである」としみる語つて居られました。今私は、これを、信仰上にもつて来て、味つて見たいと思ひます。初めの頃は、仲々有難味も起らない、寧ろ、表面のことが眼に着いて、信仰を妨げる様なことが、少くはございません。殊に、近頃は、人の考へが、物質的になつて居るから、精神の修養等と云ふ問題は、極めて、迂遠なことで、價値のないもの、様に、考へられぬでも

ありません。併しだん／＼聴聞をしたり、書物を讀んだり、所謂、復習を致しますと、宗教の味ひが、出て参ります。これに就て、私は、今の東京警察講習所長の、法學博士松井茂氏の書かれた『亡き母の面かげ』と云ふ書物を見ました時に、此の人の宗教に對する考へが、丁度現代の物質的傾向に反對したる、一種特別の意見であると思ひました。其の書に曰、

世人、往々、今日の世に於て、精神的生活を論ずるは、無用の空論なりと、稱するものもあれども、之れ畢竟するに、一を知りて、二を知らざる論なり、之れを聞く、佛法には、三業さて、順現業、順生業、順後業ありと、之れ或は然らん。之れを、歴史にて見るも、聖者の反映は、必ず、報いる所なかる可からざるものなり。吾人の生活は、常に、生命の慾望と、幸福の満足とを、要求するものなり。然れども、生命慾及び幸福慾の理想は、實際上に於ては、到底之れが一致を見ざるものなり。茲に於て、吾人は、自ら、吾人の力には、制限あることを自覺するに至れり。然れば、吾人は、斯くの如く、精神的苦痛を超越して、茲に、宇宙の法則に、信賴して、所謂、天を俱せざるべからざるに至れる也。

と、此の人の母堂が、厚い眞宗信者であつたがために、氏は感化せられて、常に、名氏を招聘して、信仰談を聴聞し、未だ純信には至らないと雖も、宗教に對する一種の妙味を、覺える様になつたと云つて居られますが、誠に、此の一種の妙味こそ、實に尊いものであります。

五、前に友人から聞いた、貯金の話の様に、百圓已前と、百圓已後との金に對する考へが、異なる様に、信仰上に於ても、妙味を覺えるやうになるのは、餘程の修養を積むだ後のことでありますから、其の修養を積み行くうちに、だん／＼に、味ひが出て、聴聞すること其ことが、

勞中樂あり

云ふに云はれぬ有難いこと、思はれる様になります。丁度、働く人が、他から見れば、如何にも、身体が難儀にあらうと、思はれるのに、面白さうに、鼻唄で、働いて居るやうなものであります。労働も、其處に至らねば、本ものでありませんから、近頃労働問題を論ずる人が、労働を、享樂化せねばならぬと云ふ様なことを、唱へ出しました。世間の労働は、兎も角として、信仰上の労働は、確に、享樂的なものがあります。先きに申し上げた、松井博士母堂の須磨子刀自は、博士が、名古屋に六年間知事として居らるゝ時、天氣のよい朝には、早くから官邸の小庭に出て、草採りを、仕事にして居られた。或る人が、それを見て、貴女の様な方が其んなことをなさらなくても、いゝではありませんかと申しますと、妾は、慙うして、草が生えて呉れるのが、何より有難い事だと思ひますと、申されましたから、今の人は、合點が参りません。それで、其の譯をお尋ねすると、妾の様な老人は、激しい運動も出来ないのに、悠うして草が生えて呉れて、草採りをすると、何より、之が、運動になつて、御飯も、甘く頂戴出来、健康も勝れるから、草の生えるのは、妾の生命の恩人であると申されたので、今の人も感じ入つたと、申すことであります。丁度之に似た話が、他にもあります。それは、前にも申しました伊藤さき女の、京参りをして、御本山のお椽の掃除をした時の感想であります。彼女が、参詣をしたのは、十六日の御命日でありました。宿屋を出る時に、今日は、御晨朝に参つて、それから、午前中の仕事に、大谷へ参らうと、豫定して参りましたが、本山の御堂の椽に

漸く見ゆる自分の

鳩の糞が、大層に落ちて居るのを見て、如何にも、勿體なく思つて、御堂の番人から、雑巾とばけつとを借りて、たすきがけで、御掃除を始め、あの廣い兩御堂の椽を、雑巾がけをしたものですから、御中食も食べず、夕方まで、かゝりました。日暮に、それを終つて、宿屋へ歸りますと、宿屋の亭主は、「貴女は、何うしたのです、朝飯も食べず、中飯も食べずに、非常に寒じてゐました。」と申しますと、彼女は「今日は大谷さんへ参る筈だったが、御堂の椽の掃除をしながら、大谷の屋根を遙に、仰いで、働きもつて、御報酬をさして、頂きました。おまけに人は、寒い寒いと云つて居らるゝのに、妾は、お蔭で、寒いことも知らずに、働かせて貰ひました」と念佛もろともに、答へたと云ふことであります。自分の仕事に、趣味を有つてやると云ふことも、矢張り、信仰上からでないで、出来ないことで、あらうと思ひます。

六、さて、斯様に、だん／＼味つて参りますと、一步は一步より、如來の慈悲の尊いことが解りますが、而も、唯それだけではありません。如來の慈悲の尊いことが、解るとともに、我身の淺ましいことが、又、愈深く感ぜられます。之は、實に、無信仰状態に於ては、思ひもよらぬことでありまして、往々、それが爲めに、我が機を、投うつやうなことが、起つて参ります。或る所の座談の席で、或る人が云はるゝには、「自分は、如來のお助けを疑ふことは、微塵もないが、唯、私の煩悶は、如何にも、自分の根性のあらが見えて、こんなものが、果して信仰を得て居る人間と云はるゝでありませんか」と申されましたから、「貴方は、其の自分の眼

活 交叉の生

につくあらとは、何んなことでありますか」と尋ねましたら、「種々ありますが、非常に、私は虚榮心が強いのであります。人からよく云はれたいと云ふ心が強いのであります。而も、其の念が、之までよりも、信仰に入つてから、よほど強くなつた様にあります」と云はれました。そこで、私は「それは貴方の虚榮心が強くなつたのではなくして、如來の鏡に照されて、之までは、問題にして居なかつた自分のあらが、解る様になつたのであります。それが、即ち信仰の徳であります」と申したことがあります。斯様な譯だから、それに就ても、亦、如來のお慈悲の尊いことを、喜ばして頂くことが出来ます。唯自分のあらが、眼に着いたげならばたまりませんが、其の下から、お慈悲に、立ち歸らせて頂くことが出来ますから、懺悔と、感謝の交叉でもつて、日暮しするの、他力大道の生活であります。

如來のおぼしめすほどに

まことに如來の御恩といふことをばさたなくして、われもひと、よしあしといふことをのみまふしあへり。聖人のおほせには、善惡のふたつ總じてもて存知せざるなり、そのゆへは如來の御こゝろによしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしきをしりたるにてもあらめど。煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたわごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておほしますところ、おほせはさふらひしか。

見え坊

一、或る人が、或る大きな町へ旅行を、しました。丁度、それが、寒い最中でありましたが停車場へ下りて、人力車に、乗りました。その車には、幌が掛けてありません。車夫の走るに任せて、寒い風が、身を切るやうに吹きます。それで、車夫に、尋ねました。「お前の車には、幌を着けないのか」と、車夫は「ないことはありませんが、掛けぬのであります。此の町では、なるべく幌を、掛けぬことになつて居ります。」と答へましたが、その意味が、解りかねますから、その譯を聞くと、「人力車ばかりではなく、自動車でもさうであります。何となれば、幌を掛けると、誰が乗つて居るか、それが見えません。處が、せつかく、自動車や、車に乗つても人に見て貰はねば、乗り甲斐がない。誰が、乗つて居るか云ふことが、解るやうに、ワザと幌を掛けないことになつて居ります。」此の返答を聞いて、今の人は、如何に、此の町の人が見え坊であるかと云ふことに、驚いたと、半ば嘲笑的に、其の旅行の日記に、書いて居ります。之等は、いさゝか極端の様でありますが、人情の機微をうがつた話の様に、考へます。私はよく之に似た話に、出会ひました。或る人に依頼されて、去る所の追弔會に、お話を参りました時、五六人の法中が居られた中で、或る同行から、その追弔會をされる人が、先般死んで葬式の時、途中の行列を略して、寺で告別式を擧げた。其れが爲めに、會葬者は、寒い目にも會はず、時間の經濟にもなり、非常に、好都合でありましたから、之から、あんな風にしたならば、よいではありませんか、と申しましたら、或る法中が「あの時は、雨が降つてゐたので

止むを得ずあゝしたのであるが、お天氣のいゝ時ならば、寺式の葬式では、承知が出来ぬ。何故かと云へば、行列が長く續いて、花輪等仰山に並べられてあるのを、葬式が盛だと、此邊の人々が思つてゐるからだ」と申しました。けれども、葬式の様な、眞面目な儀式を、矢張り、見え坊にやつつけるのだから、お話にはなりません。之も、最近に、耳にしたことであります。が、昨年、東京、大阪の兩驛の入場券を、十銭にしたのを、更に、送迎人が減らないから、鐵道院は、之を、五十銭に、値上げをしようとして居ると云ふことであります。或る人が之を評して、五十銭にしても、恐るまい、見え坊の日本人は、送迎會の宴會費は、五十銭値切つても、五十銭の入場券を、支拂ふのを仁義と、心得て居るからであると申して居ります。兎も角、かゝる虚偽の生活を、餘り罪惡とも心得ず、寧ろ、美徳の様に考へて、やつて居るのであります。

二、總て、斯う云ふ風に、見え坊を飾ると云ふことが、土臺になつて、我々の生活が、營れて居ります。併し、正しい道から考へると、虚偽は、即ち罪惡であります。けれども、我々の世に於ては、之は、罪惡だの、之が罪惡でないの云ふ分け目は、總て、見方の相違であります。天地の公道など、稱して、美しい名目に包まれて、矢張り、罪惡を犯しつゝあるのであります。一例を申しますれば、個人として、人を殺すことは、如何なる理由があつても、殺人罪には犯されます。だが併し、國と國との殺し合ひは、平和のため、人道のためと稱して、此の

見方の相違で大惡も至善

上もない美徳の様に、云はれて居るではありませんか。個人同志の盗み合ひは、理由の如何に拘らず、竊盜罪には犯されますが、國と國との盗み合ひは、誠に結構なことであると、考へられて居るではありませんか。人を殺したものが罪人ならば、人のものを盗んだものが罪人ならば、戦争の時、人を殺しても、敵の武器や、彈藥を占領しても、同じ罪惡でなければなりません。然るに、彼れを罪惡とし、此れを功勳とするのは、何うしても、聞えませぬ。畢竟、見方の相違でありまして、言ひ換れば、御都合主義から割出した、勝手氣儘の解釋と、云はねばなりません。敗殘の將、ロザノフが、我が國へ亡命して來たが、居るに所なく、あちらに逃げ、こちらに隠れ、見るも氣の毒な有様でありましたが、「勝ば官軍、負けば賊軍」人間世界のことには大抵、之れ位のものであります。

三、世間のことは、致し方がないと致しましても、せめて、宗教界になりとも、虚偽があらせともないので、何んぞ知らん。宗教界も、亦、虚偽を以て、築き上げられて居るのは、當に、今日計りではありません。有名な話であります。鎮西の祖師、聖光房が、未だ、修養時代に、法然上人の膝下から、お暇を乞うて、九州に歸らうとした時、笈櫃を負うて、門を出やうとするとき、聖人は「聖光しばらく待て、其の方は、忘れものをして居る。三つの鬘を断ることを。勝他と利養と名聞だ。せつかく來ながら、其の鬘を、着けたまゝ歸るのが、殘念だ」と仰せられました。之は、七百年前の聖光に對する御教化だと、他事に考へてはなりません。

聖光房の三鬘

せん。今日の宗教界は、より大きな、より長い誓を、幾つも／＼有つて居ると思はねばなりません。

四、それで人間を、何處までも、虚偽で固まつて居ります。然るに、それを止めて、しまふと云ふことは、絶対に出来ません。何となれば、人間の生命は、虚偽でありますから、死んで生れ変わるならば、別であります。人間の皮を、かむつて居る已上は、何處に生きて居ても、何時でも虚偽であります。之に對して、一切の道徳も、宗教も、それを捨てよ、それを悔ひ改めよ、然らば赦されんと云ふのが、條件であります。だから、我々は、一切の道徳、宗教の前には、頭が上がりません。その埒外に放り出されなければなりません。然らば我々は、其の虚偽が、よいことであると思つて居るかと思つて居ると、それは、悪いことであると、知つて居り乍ら、其れを止めることが、出来ません。即ち理想と、現實との戦ひが起りまして、其處に私共の煩悶が、起ります。よいと思つたから、その如くなるかと申しますと、それもならず、悪いと思ふたから、それを捨てる事が出来るかと云ふに、それもならず。思ふやうにならぬが此の世界の有様であります。故に、我々は、一切の道徳、一切の宗教に、規定せらるゝ所の、悔ひ改めよと云ふ關門を、通つて行くことは、何うしても出来ません。

五、我々には、眞に懺悔し得ざる心があります。有名な國木多獨歩の臨終は、それをもの語つて居るものであります。故に、眞實に、我々を救うて呉れる宗教は、懺悔し得ざるまゝで、

抱擁する所の絶對的のもので、なければなりません。即ち絶對の他力、如來の願力であらねばならぬ。之を談つて居るのが、二河白道の喩の上に表はれて居る、三定死の罪人でありまして進むも亦死せん。退くも亦死せん。止まるも亦死せん。行きつまつた所に、本願の白道が、開けて、側目も振らず、其の儘來いと喚ばるゝまゝに行くならば、いゝのであります。之を『觀經』で云は、下々品の臨終、苦逼失念の機であります。火車の來現を、眼の前に眺めながら唯、善知識の語に信賴して、具足十念稱南無阿彌陀佛、機の善惡を省す、大悲の懷に飛び込んだ味ひが、彼の狀態であります。要するに、我々では、之が善か、之が悪か、善惡の二つは、徹底して解りませんから、自分の御都合主義で、善しとか、惡しとか、規めて居る。けれども、善が善でなし、惡が悪であります。本當の善惡は、如來の思召程に、知り通したらば善いのであります。如來の思召ほどに、知り通したらばこそ、悪いのであります。ものさしは何時でも、如來であります。斤量は常に、お慈悲であります。如來の斤量、如來のものさしに、當て見ないこと、善惡の評價は、出来ません。然るに、其の如來を外にして、善惡を争ふ故に、誠に、如來の御恩と云ふことをば、沙汰なくして、吾れも、人も善し惡しと云ふことをのみ申しあへり」と申されてあります。根柢が、既に誤つて居るから、眞の悔ひ改めは、出来ませんが其處に、悔ひ改めを要求する一切道徳や、一切の宗教は、實を申すならば、之ほど、自己錯誤はありません。我々は、斯様に、あやふやなものでは、徹底的の安住が、得られませぬから、

善惡の二つを、沙汰せない親鸞聖人の信仰に、同心して、絶對の慈悲の懷に、安住するより外に、道はないのであります。煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、萬の事皆もて、空事、たわごと、まことあることなきに、唯、念佛のみぞ、まことに在します。「仰ぐべきは、唯、此の絶對他力の大道ばかりであります。(已上大正九年四月下旬稿)

補遺

一、已上「絶對他力の大道」と稱する一篇は、今鈔總結の文を据りとして試みたる談片であります、然るにこの總結の文は、種々の重要問題を最も多量に包含してをりまして、今鈔全體の上から眺めて要章の一つでありますから、到底上述を以て盡したといふ譯ではありません。たゞ一二の要點を掻い摘んで味はつてみただけであります。而して一章が五段に分れることも前述のとほりで、その五段の結歸するところは、今鈔を御製作になる理由を明かにせらるゝのであります、此事も前にすでのべておきました。さて五段の中第五段の文に曰く、
まことにわれもひども、そらごとをのみまふしあひさふらうなかに、ひとついたはしきこと
のさふらうなり、そのゆへは念佛まふすについて、信心のおもむきをもたがひに問答し、ひ
とにもいひきかするとき、ひとのくちをふさぎ相論をたゝんために、またくおほせにてなき
ことをも、おほせとのみまふすこと、あさましくなげき存じさふらうなり、このむねをよく
くおもひどきこゝろえらるべきことにてさふらう。これさらにわたくしのことばにあら

といへども、經釋のゆくちもしらす、法文の淺深をこゝろえわたることさふらはねば、
さだめておかしきことにてこそさふらはめども、故親鸞聖人のおほせごとさふらひしおもむ
きを、百分が一分はしばかりをもおもひいでまゐらせてかきつけさふらふなり。かなしき
かなや、さいはひに念佛しながら、直に報土に生まれずして邊地にやどらんこと、一室の行
者のなかに信心ことなることなからんために、なくく筆をそめてこれをしるす、なづけて
歎異鈔といふべし、外見あるべからず。
之は正しく今鈔の製述理由をのべられたものであります。

二、之が亦三小段に分れ、初めの一段は、前の第四段の「よろづのことそらごとたわごとま
ことあることなき」といふを承て、當時わが宗教界に、種々のうそいつわりが流行し、信仰界
を攪亂するものがあることを歎かれました。次の小段では、そこで學淺く識乏しき我ながら、
敢て故聖人の御遺志を傳へんがために、今鈔を書くのであるといひ、第三小段に於て、虚を捨
て實に歸し、異を去り正に就かんことを懇諭せられて、筆を結ばれてあります。字句概ね解し
易し、返復その意をうるに難しとせぬ。

三、この總結の文中、圈點を附し置きたる字句を略解しやう。
しごげなく 法要典據によるに、大慶師は「靜氣無し」の義、即ち騒がしいことであると解し
てをられます。又履善師は、「しごろけなる」こと、みだりがはしいことと解してをられます。

又超然師は、「四度解」即ち昔租税は一年四期に計算して上納することになつてをたつた、それがうまく行くを四度解又は四度計と云ひ、うまく行かぬと、四度解ないといふたものである、それから轉化して、亂雑になることを四度解ないといふやうになつたものであらうと解してをられます。何れにせよ、亂れることであつて、今は信仰の不統一をいはれたものであります。

目やす 目安の字にて、一目みればわかり安いやうにすること。

大切の證文ども 第一章から第九章までは、みな章の終りに「云々」といふて、故聖人の仰であることを明かにしてあり、第十章已下の筆方は、少しく異なれども、矢張處々に「故聖人の仰せ」とか、「おほせ候ひき」などゝいつて、筆者の自言でないことを示してある。此等を指して「大切の證文」といはれたものである。

そくばくの業 幾許の業、即ち罪業の積りて數知れぬほど多きことである。

わが身にひきかけて 我身に引懸けること、自分一人に引受て味ふこと。

いたはしきこと 心を痛めねばならぬほどのこと。

おもひとき 充分了解しておくべきこと。

ゆくち 湯口で、温泉などで湯の流れ出る口、轉化してもの、筋道のことをいふ。又は行道之もやはり筋道のことである。

歎異鈔拜讀の後

眞宗の假名のお聖教の中に、信仰三書として、私共の味讀して盡ざる法味を感ずるは、今鈔と安心決定鈔と、御一代記開書とである。然るに此等三書のあらはすところ、各特色あり歎異鈔は我々の機を明し、安心決定鈔は法の尊さを明し、御一代記開書は、この機、彼の法に浴したる機法交叉の状態を明されたもの、様に味はれます。私は今、茲にその隨一たる歎異鈔を講了しましたから、更に他日の機會に於て、他の二書を味讀せんことを期します。

私は今鈔の講解を始めたのは、今から四年已前である、當時創刊せられた佛典通俗講義の一科として、殆んど毎月少しづつ筆を執り、同講義録の終刊せる大正八年九月には、漸く第十六講を講了したまで、第十七講已下は、その後の筆にかゝるものであります。全篇を通じて時々違つた氣分で眺めたことであるから、叙述の體裁統一を缺いでゐるのは止むを得ぬばかりでなく、主觀の思想上の變化が、自ら文章の上にあらはれ、後から繰り返して讀んでみると筆者たる私でさへ、こんなことを思うてをつたかと思はるゝ事がないでもありません。殊に丁度講述の最中に、私自身、病氣のため身體的に而して精神的に、甚だしき不安と動搖を感じた事もあり、且つ外圍の事情としては、例の空前の世界戦が終り、物質的精神的に世界改造の新時代に逢着した爲め、それ等の反映も、自ら茲にあらはれ、あれやこれやで、可なり

不統一な、よく云へば變化のあるとでも云はれるものになつたのであります。そこで今からみて幾ヶ所も補正したい點もないではありませんが、それはすべて小刀細工になりまして、敢て虚偽をかさぬる事になると存じ、すべて本のまゝで公にすることにいたします。蓋し私として之が却つて講述四年間の外的内的の状態を縮寫した記念にも思つてあります。

私は圖らず昨年同車した未知の人から、歎異鈔の偉大な教義であるといふ事を聞かされた。その人の信仰の友池山氏は岡山高等學校の教授であり、池山氏は今鈔を獨譯した評判の人であります。氏が今鈔を獨譯するに就いて、同僚の獨逸人某にしばらく修辭上の相談などせられたさうであるが、彼の獨逸人は池山氏から、それとなく今鈔に高調せられた親鸞聖人の絶對他力の教義を聞き、日本にもかういふ偉大な思想があるかといふて、驚嘆の聲を漏したといふことである。獨逸人を驚かしたといふ事が、何も歎異鈔思想の偉大を證明するに足る所以ではありませんが、私共は、常にこの尊い思想に入りひたりてをて何とも思はず「いつもそのことばかり聴聞」してをるのであります。まことに勿體ない事と存じまして、茲に最後にこの一挿話を附け加へておく次第であります。(巨正大正九年五月中旬稿)

歎異鈔講話 (終)

大正九年十一月一日
大正九年十一月五日
大正九年十一月三日再發行

定價金參圓五拾錢

送料金拾八錢

編纂者 西谷 順 誓

發行者 清水 精 一 郎

印刷所 京都市下京區西洞院通七條南入
内外出版株式會社印刷部



發行所 振替東京四一八二五 電話二六六七 興教書院

明珠盤上轉如

絶對他力 彌陀本願 の金剛心 を絶對の 安住所こ して示す 活る信仰 其の價值 は是非す るまでも なく慥に 布教の活 模範教材 の福袋也

活ける信仰

新刊好評 三六版洋装 定價六十錢 送料六錢

西谷順誓師著 熱心誠意を以て萬衆に信仰を鼓吹するは本書也。一本書は著者が本年一月の御正忌に某寺に於て述べたる説教廿五篇を集めたるよりなる、昔の説教本の熾直しや相手次第に御方便をふりまわした説教集とは其の趣きを異にし、何れも記者の肺腑より出でたる眞面目なる法談たるなり年廻の法要を勤めしめんため地獄を説き、寄進を募らんために無欲を説く類の説教は現今の世にてあらざるがなり。著者は謙讓してこの説教が老人の心に耳遠かりしを語れるだけ形式に捕はれずして自己の所信を披露したるを喜べるなり。言々句句玉の如き温かさのうちに外物のよく如何もすること出来ぬ重味と強さがあり、さ見えてゐることは何よりも有難いことである。若い人達特に眞面目に自己を考へてゐる人々には是非一讀すべき良書である。

信仰説話

好評五版 三六版上製 定價一圓五十錢 送料十錢

雲山龍珠師著 師の説教法話は親切で有難く倦厭の情が起ぬ。雲山司教は温厚なる篤學者である。六條學館の講師たること十数年のその間一意専心に子弟を教養せられて、その陶冶を歴たものが既に数千名の多きに達して居る。また四方に遊化し、御同願御同行に對して、出離生死の一大事を詳々として説示せらるゝときは、言々肺腑を突いて出て来る。また教壇上の人となつては滔々たる懸河の辯は先づ聽衆を感するの概がある。その崇高なる信念と、その巧妙なる説話は共に當代に得難い教家である。本書は同師が諸方で講演せられたものを蒐集大成したもので、新進教家が座右の珍たるは云ふ迄もなく、僧俗を問はず誰でも一本を懐にして居つて善い本である。

佛教大學教授 高木俊一師著

佛教概論

菊版クロス上製 定價四圓 送料拾八錢

佛教は印度に起り、支那朝鮮を経て日本に來り、其間二千有餘年各地に傳播して宗を分ち、派を岐ち、地球上幾億の生靈を支配し世界文化の生命を賦與してゐる。本書は即ち其佛教の哲理と實踐とに於ける教義の全體を概括し、一種の體系の下に組織して一目瞭然たらしめ、精細に論述してある。尙各宗派の歴史並に本文の註釋を附せられたれば、一面各宗綱要の代用として佛教研究者の最も便宜多き書たること共に、亦適當なる教科書たるは、著者が多年佛教大學に於ける、實際教授上の產物たるよりするも、明白なる事實である。

勸學 島地默雷師題辭 米村永信師述

宗要安心論題

定價壹圓廿錢 送料拾貳錢

島地和上は題して『肝腑骨目』といふ、眞に安心論題は一宗の肝腑なり骨目なり。本書は輔教米村永信師の著述にして從來の論題書とは大に其面目を異にし、各題に就て出據釋名義相問答釋疑の四段に分ちて頗る丁寧に記述されたり。文章は平易にして明了、よく宗學書流の難澁繁雜の弊を避け、義門は廣く諸説を擧げて一義一派に偏せず讀者をして宗意安心の岐路に惑なからしむるを主とせられたり。

發行所 京都西六條 興教書院

振替 大阪一〇八一五番 東京四一三番

文學博士 前田慧雲師述 敎家説林第十篇 最新版

佛敎と人生

三六版七百頁 金壹圓八拾錢
天金クロス製 小包料 八錢

本書内容、第一篇「佛敎の要義」は佛敎と人生問題を、哲學的・信仰的、二方面より解決し、第二篇「人生の本務」は、人生の目的、佛敎の實踐的・道徳觀を述べ、第三篇「無量壽經道徳觀」、第四篇「五善と五惡」は、佛敎の倫理は、信仰の源泉より流れ出づる所以を細叙す、第五篇「信仰の本領」は、隨所講演十五題より成る。以上五篇を通讀せば、佛敎の主旨より、實踐道徳に至るまで、潑刺たる生々の氣を捕捉するを得ん。

荒井 涙光 著

●話題五十題

佛敎新オトギ

四六版美本 金五拾錢
郵税 六錢

著者は曩に「佛敎お伽噺」第一編として、家庭に於ける父兄、日曜學校に於ける講師の話材、兒童自身の讀み物として、佛典中の興味ある、譬喩、偶話、教訓的のもの五十題を面白く編述せられたり。本書は其第二編とも稱すべき、面白き話題五十種並に「少年講話十題」を撰び、以て家庭及び日校の教材に供せらる。

荒井 涙光 著

●話題五十題

佛敎お伽噺

四六版美本 金五拾錢
郵税 六錢

發行所

京都都市油小路御前通上ル
振替大阪一〇八五一番

興敎書院

本願寺布敎使

井上盡奧師著

一二諦修養敎談 青年修養敎談 婦人修養敎談

錢拾五價定 錢拾五價定 錢拾五價定
錢六料送 錢六料送 錢六料送

眞諦即ち宗意安心を尤も平易に説明し、俗諦即ち倫理道徳の修養談を、實地に工夫應用せられしもの
参考にも供へたく、師が是迄青年布敎に職を奉ずる間、組み立てたる敎案より數編を取つて之を作成したるもの青年布敎者の好參考書也
婦人の日常修養に缺くべからざる如來の敎法を、知らしめん爲、婦人會を有し毎回自ら講演せられしもの、婦人布敎者の好參考書

■布敎家の苦心研究

すべきは何か

■今の現代に適する

説教ごは何か

■適者生存を如何に

工夫すべきか

■説敎の色彩をば

如何にすべきか

師は元高輪佛敎大學卒業後、五ヶ年間北米の開敎使として、熱心に各方面の布敎傳道に従事せらる。即ち本書は、一は一般信徒に對して二諦の敎旨を宣布し、二は専ら青年諸士に對し、三は婦人諸姉に對し、實地に布敎せられし敎案なり。敎材の嶄新なるは勿論、何れも實行的に新案工夫して、一は讀者諸兄妹の信仰と修養に資し一は現代布敎家の參考に供せらる

興敎書院發行

通俗なる家庭の好物

親心即佛
心能く親
の慈愛を
思ふと共
に深く如
來の恩徳
を仰げ!!
滑稽諧諷
寓話頓智
の中に語
るものは
總てこれ
人生の活
きた教訓

佛の心と親心

好評五版
四六版洋装
定價一圓五十錢
送料十二錢

黑瀨知圓師著 — 家庭の讀物として近來稀に見るところの好著也 —

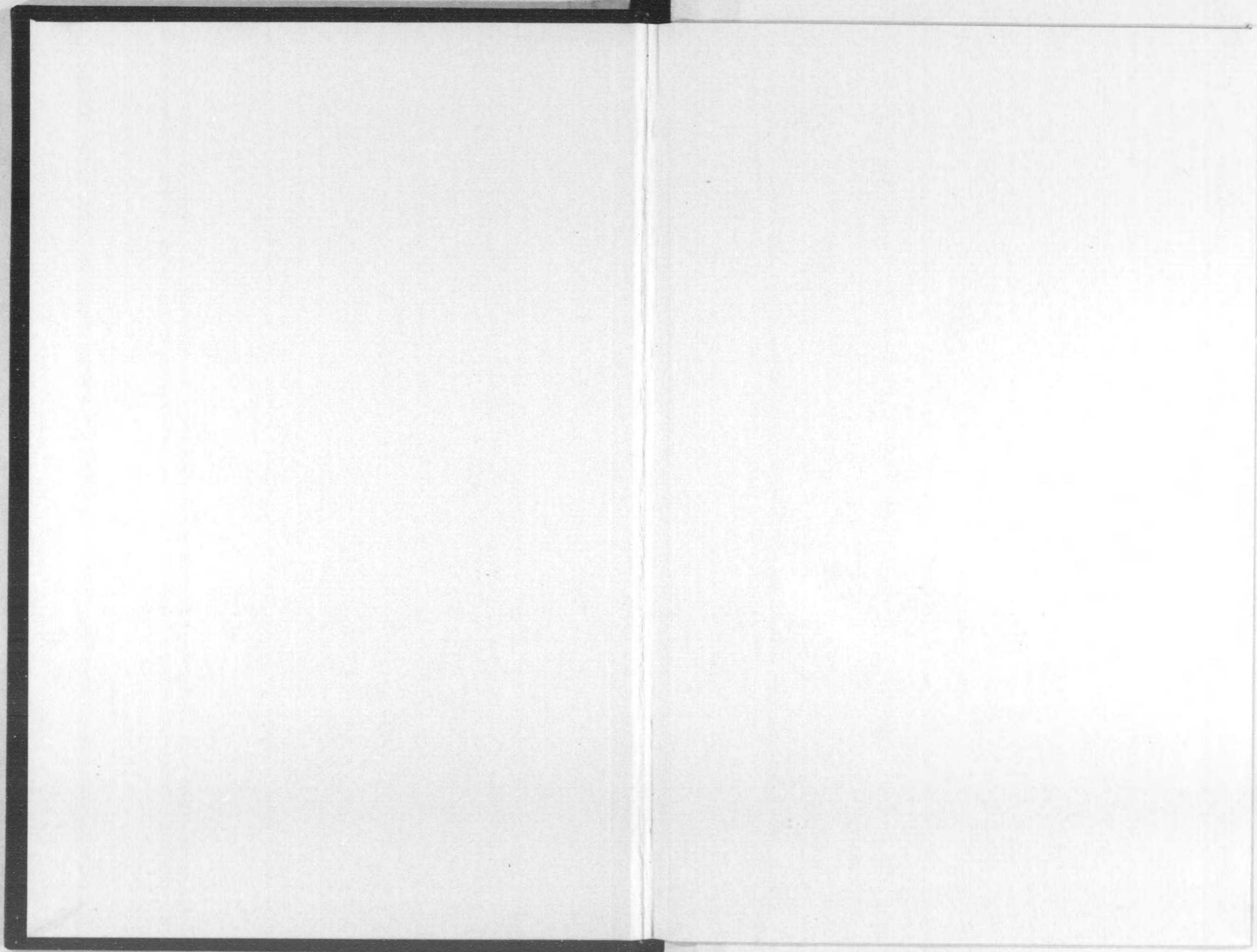
是れ黑瀨氏の處女作なり、同氏は父を喪ふて二十年、母に離れて他郷に遊ぶこと十餘載、寂寞の裡に父を
戀ひ母を慕ふ眞情は、迸りて宗教的信念となり、久遠の親心に泣き、同體の大悲に明び、如來の一人子たる
恩寵に感激しつゝ、肉の親をさほして靈の親を讃へたる衷心の告白を記述せるもの即ち此書也 内容は久遠の
親心を畫きて十章、親心の徹底を嘆する十章、親心の感激を録するこゝ十章、是れ著者嘗に信念の告白たる
のみならず、著者が常に獄窓に呻吟する罪の子に接して、如來の親心を宣傳する教化の實材也、記録也。體
裁は優美なる四六版四號活字總振假名、教家の資料、家庭の好書として必讀を推奨す。

大笑ひ小笑

好評五版
三六版上製
定價一圓五十錢
送料八錢

黑瀨知圓師著 — 布教資料として家庭の讀物として得る所甚大也 —

面白く可笑しく嬉しく有難く、談笑の間に、如來の大法が傳へたい。當場のがれの人笑せを避けて、眞面
目な無邪氣な、天真な而も皮肉な峻烈な痛快な「大笑ひ小笑」の裡に、深刻なる印象を興へ、半平扱くべから
ざる信念修養が築きたい。此の要求に應ずべく現れたのが本書であります。されば本書に接するものは、恰
も走馬燈に對する如く、變現出沒計るべからざる、滑稽、頓智、實話、寓話、譬喩、訓言に應對暇なく、過
に小笑、忽に大笑。時に相好を崩し、時に襟を正しつゝ、省みて何時しか胸中或物を獲得せしむる、面白き
有益なる讀物なり。



終

